Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

210.58
N688t
00227946

0 複写

トエ14-47

武市瑞山關係文書 第一

武市瑞山自畫題詩肖像

武市半太藏

国立国会図書館蔵書

国立国会図書館

国立国会
26.3.12
図書館

227946

武市瑞山自畫題詩肖像

武市半太藏

227946

210.58N688t

武市瑞山關係文書

緒言

本書ハ舊高知藩勤王黨ノ領袖武市瑞山ニ關スル史料ヲ蒐集編次セルモノニシテ瑞山往復ノ書翰及他人ヨリ瑞山ニ寄セシ書翰ヲ骨子トシ其然ラザルモノト雖モ直接瑞山ノ行動ニ影響アル書翰文書等ハ勉メテ之ヲ網羅シ之ヲ繫クニ編年ヲ以テス刊本上下二卷下卷ニハ瑞山ノ詩歌及ビ關係者ノ日記手記等ヲ附錄トス而シテ本書史料ノ蒐集編纂等ハ專ラ本會幹事岩崎英重氏ノ執掌セラレシル所ナリ

緒言

大正五年十月

日本史籍協會

自叙

馥郁タルモノハ花ノ香也凜烈タルモノハ人ノ義也武市瑞山志氣高潔的然寒梅一枝春ニ魁シテ清香ヲ放ツガ如シ幕府ノ末造志士龍驤雲騰　乾綱ノ解弛ヲ慨キ　王愾ニ敵セントス而シテ一代士氣ノ鼓吹者トナリ遺烈更ニ百世ヲ薫スルモノ水戸ニ藤田東湖アリ長門ニ吉田松陰アリ瑞山二人者ニ比シテ學殖或ハ之レニ及バズト雖モ丹心火ノ如ク觸ルル所悉ク鎔解セントスル白熱的至誠ニ至テハ松陰ト騁馳シテ多ク遜色ナシ而シテ藩情頗ル薩長二藩ト異ナル高知藩ニ生レ上ニ獨裁自負ノ英主山内容堂ヲ戴キ下ニ强

項自立頗ル馭シ難キ土佐人ヲ統率シテ侃々諤々ノ大義ヲ振ヒ一藩ヲ擧ゲテ勤王ニ終始セシメントセシ苦節力量ニ至テハ或ハ東湖ニ似タル所アリト雖モマタ自ラ異ナル所アリ恐クハ之レ瑞山ノ獨擅場ナランカ其深沈寡默多ク言ハズ言ヘバ必ズ實行セントス强固ナル意志ニ至テハ瑞山頗ル西郷南州ニ似タルヲ見ル曩ニ舊高知藩勤王黨ノ生存者ヲ以テ組織セル瑞山會ニ於テ土佐維新勤王史ノ著述アルヤ主トシテ亡友坂崎紫瀾其任ニ當レリ瑞山ノ行動ヲ經トシ殉難者八十餘人ノ事蹟ヲ緯トシテ無慮壹千餘頁ノ大篇ヲ編述シ脈絡整然條理一貫セル手腕ニ至テハ洵ニ推賞ニ値スベシト雖モ予ハ猶其根本史料ニ於テ幾多ノ遺漏アルヲ發見シ窃ニ以テ遺憾トセリ偶〻田中青山伯ニ依テ武市家ニ存スル瑞山ノ遺簡ヲ見マタ畏友田岡髮山氏ガ嘗テ土陽新聞紙上ニ掲載セル瑞山獄中ノ書簡ヲ見ルニ及ビテ蒐集編纂ノ念頗ル動ク爾來事ノ瑞山ニ關スルモノハ斷簡零墨ト雖モ雲烟過眼視セズ必ズ之レヲ筆記謄寫スルモノ三年有餘昨夏土佐ニ歸省シ一別二十四年ニシテ舊友上田開馬氏ヲ訪ヒ其藏スル所ノ瑞山及ビ同囚志士ノ書翰ヲ見ルニ髮山氏ガ嘗テ採錄スル所ノ原本ナリ是ニ於テ神馳セ意躍リ瑞山我レヲシテ此ノ業ヲ成サシムルカノ感アリ卽チ之ヲ借閲筆記シ爾來潛心推究考定ニ從事スルモノ更ニ年餘漸ク玆ニ之ヲ脫稿スルヲ得テ日本史籍協會ニ寄贈シ之

ヲ會員諸君ニ頒ツヲ得ルニ至シハ余ノ尤モ光榮トスル所ナリ

本書ノ編纂ニ當リ太タ苦辛ヲ費セシモノハモト是多クハ瑞山一家ノ私翰ニシテ、年號干子月日ノ記載アルモノ尠ク特ニ獄中ノ書翰ニ至テハ祕密通信ニシテ悉ク暗號陰語ヲ以テ滿タサル卽チ事實ニ據テ年次日曆ヲ推シ偶〻日付アルモノニ據テ事實ヲ究メ或ハ故老ニ就テ暗號陰語ヲ質スト雖モ晦澀猶朦朧トシテ隔霞看花ノ感アリ懊惱爛額爲メニ幾度カ稿ヲ燒カントセリ而シテ蒐集攷定並ニ未ダ全シト云フヲ得ズト雖モ今ヤ略〻大要ヲ誤ラザルヲ得ルニ至リシハ余ノ私カニ欣快トスル所ナリ

本書ノ編纂出版等ニ關シテハ田中靑山伯、武市半太、田岡髮山、上田開馬、中城直正、武市建山、早川素水ノ諸氏ニ益ヲ受クルコト頗ル大ナリ特ニ記シテ感謝ノ意ヲ表ス

大正五年十月

鏡川　岩崎英重謹識

武市瑞山關係文書第一目錄

一系圖　一

一江戸修業時代（自安政三年七月二九至同四年八月十七日）　自一九至二六

一歸國時代（安政四年十月十九日）　二六

一江戸再遊時代（安政五年正月二日）　三〇

一歸國時代（安政五年四月四日）　三一

一江戸盟約時代（自文久元年七月二日至同年九月十五日）　自三三至五六

一歸國鼓舞時代（自文久元年十月中旬至同二年六月二日）　自五六至九〇

一上京周旋時代（自文久二年六月十一日至同年十月四日）　自九一至一四〇

目錄

一勅使隨從東下時代（自文久二年十月初旬　至同年十二月六日）　自一四〇　至二〇八
一同歸京周旋時代（自文久二年十二月廿三日　至同年同月晦日）　自二〇八　至二一四
一歸國周旋時代（自文久三年正月四日　至同年同月十五日）　自二一四　至二二八
一再上京周旋時代（自文久三年正月廿一日　至同年四月下旬）　自二二九　至二五一
一歸國周旋時代（自文久三年五月二日　至同年九月十二日）　自二五一　至二二七
一入獄時代（自文久三年九月廿一日　至元治元年十二月晦日）　自二二七　至二七一

系圖

武市治部佐康重

藤原武智麿之後胤備後守安友ハ申納言雄友之四男ナリ數代伊豫ニ住シ武市ヲ氏トス入代之孫武市伊豫入道安基之玄孫武市武者所六代之孫ナリ文安之頃ヨリ土佐長岡郡仁井田ニ住ス

別ニ世系アリ

武市三郎左衞門重勝

武市賴母佐重芳

別ニ世系アリ

武市治太由

武市喜助重貞

武市三介

子孫ナシ

武市久介

武市左兵衞

武市五郎右衞門

武市新左衞門

- 武市七右衞門
  - 武市介左衞門
    - 武市友甫
    - 女
- 武市傳藏　庶民ト成ル
- 武市六郎兵衞　庶民ト成ル
  - 武市三介
    - 武市利兵衞
    - 武市栗助
    - 井上亀藏
  - 井上左兵衞
    - 井上吉三郎
  - 大塚六郎兵衞
  - 武市五郎左衞門
    - 武市貞右衞門
  - 武市仙慶
    - 武市順ト
  - 武市喜右衞門
  - 女
  - 女
  - 武市又左衞門重勝
    - 武市忠兵衞重直　後ナシ
    - 武市春悅
      - 武市春賀
      - 武市春賀
    - 武市惣助　實先春賀子
    - 武市三甫
    - 武市又左衞門
      - 武市忠兵衞　後ナシ
      - 武市源左衞門　後又左衞門ト改ム

- 武市槇右衞門
- 武市喜助
- 武市元丞
- 女
- 女
- 萬五郎　早世
- 武市半右衞門重高
- 武市喜助—武市半六—武市十郎兵衞
- 女　武市少左衞門妻

- 武市半助
- 武市半右衞門
- 武市半七
- 女　北川又八妻
- 女　横山治大夫妻
- 女　北川半五郎妻
- 武市半四郎　早世
- 岡徳太郎
- 岡團之助
- 岡來之丞

- 武市忠助
- 岡　新之助　早世
- 武市平六正勝
- 武市伴右衛門正信
- 武市彌八郎　早世
- 女
- 武市半八正久
- 女

- 女（登美）　勝賀瀨小八郎妻
- 武市半右衛門正恒（妻大井氏鏡）
- 女（菊）　鹿持藤太妻
- 女（美多）　小笠原嘉助妻
- 女（奈美）　山崎孫平妻
- 武市半平太小楯
- 女（琴）　内村彌平妻
- 田内惠吉

武市半助

從是二代先野郷士ニ被召出候由
系燒失

實子 半右衞門

無子仍而由緒有之小笠原某ノ子養嗣ス但郷士ニ被立享保十一午年貳人扶持切
米五石被下郷士御用人ニ被仰付

半助二男 半七

半四郎

實子 德兵衞

上ニ德太郎トアリ

武市平六養育安藝郡田野ヘ移明和五子年岡收八養育ニ替苗字岡ト革
實子岡團之助後見相勤中安永五申ノ年團之助病死無子仍而郷士職分相續天明
長ノ年長岡郡西野地ヘ轉住

實子 岡團之助

明和五子年小松宅平ヨリ讓受郷士ニ被召出幼年ニ付父德兵衞後見ヲ以相勤中
病死無子仍而跡式郷士職分父德兵衞相續

實子 來之丞

文化七午年父跡目職分相續

實子 甫助

文政五午年父跡目職分相續

新之助 早世

左彌太

永次郎

養子 平六

享保十八丑年養父跡目無相違相續被仰付之

（原註）直正日下文ノトコロ可疑姑ク原文ニ從フ

寅子
伴右衛門
安永五申年父平六代勤同六酉年十二月父跡目無相違相續被仰付之

寅子
半八
寛政二戌年父半助代勤同十四巳十二月父跡目無相違相續被仰付之文政五午年數ヶ年御用方出精殊ニ丑ノ年御藏御算用向之儀存寄申出盡粉骨相勤候譯を以御詮義之上格式白札ニ御引直シ被仰付之

寅子
半右衛門
文政九戌年父半八煩名代相勤天保二卯年父跡目格祿共無相違相續被仰付之弘化二巳年病症快氣迄倅半平太御番煩名代奉願嘉永二酉年病死

寅子
半平太
弘化二巳年煩名代相勤嘉永二酉年父跡目格祿共無相違相續被仰付之嘉永五午年御褒賞之上一生二人扶持被下置之御目附方ニ而被仰付之（武市家藏）

武市半平太世代記

年月不知毎月十二日祭リ來ル

武市治部佐　康重
同　人　妻
武市半平太元祖
武市賴母佐　重芳
同　人　妻
同　喜　介　重貞
同　人　妻
同又左衛門　重勝

德應院釋淨果得生居士
寶光院釋寂雲妙貞信尼
二代　天文十四巳八月十八日
圓德院釋淨慧得本信士
天文十八申七月十七日
淨行院釋妙光信尼
三代　天正八辰八月十二日
常德院釋遍照光專
元祿元辰六月八日
善覺院釋達性妙淨
四代　元祿三午八月十三日
淨雲院釋常圓道放

慶長四亥八月八日

諦善院釋寶林妙誓　同　人　妻

年月不知

專秀院釋妙常信尼　同人後妻ト有

五代　元和六申二月十四日

智淨院釋廣榮法雲　同　忠兵衞　重直

寛永一寅三月四日

圓瀧院釋延重妙正　同　人　妻

六代　寛永八未三月三日

釋貞淨善通信士　同半右衞門　重高

寛永十四丑四月四日

釋貞心妙照信尼　同　人　妻

七代　寛保元酉二月十八日

釋大圓深廣信士　同半　介　支

寛保元酉十一月廿一日

釋誓了妙林信女　同　人　妻

八代　延享二丑十月廿四日

釋智敎淨誓信士　同半右衞門支

元文四未二月八日

釋壽性妙說信尼　同　人　妻

九代　寶曆二申六月廿六日

釋至弘道淸信士　同弟半七支

寶曆十一巳七月四日

釋閑了妙貞信尼　同　人後妻

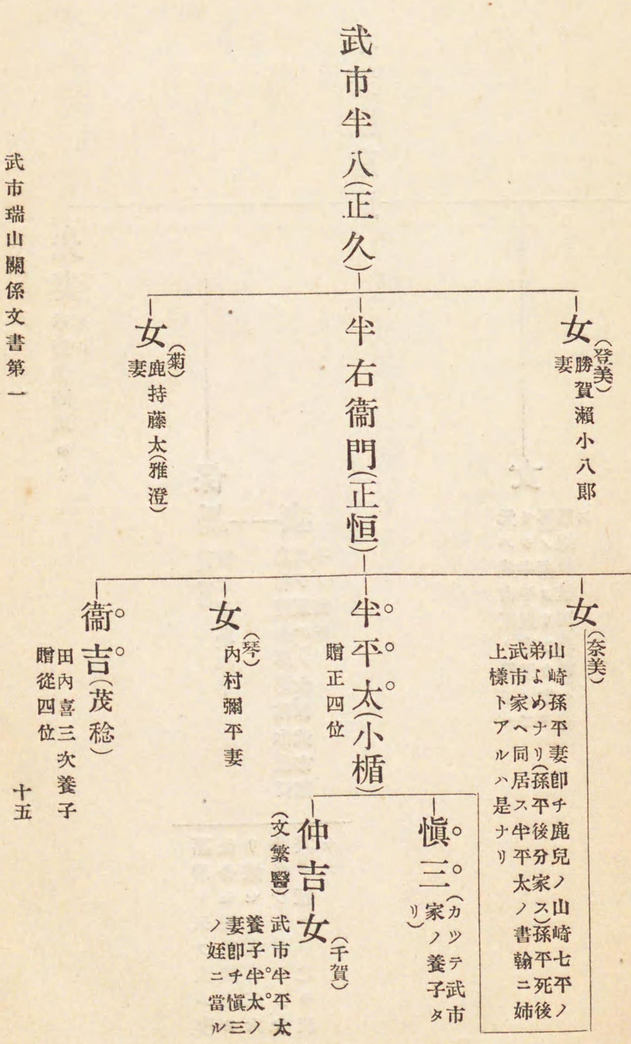
十代　安永六酉八月廿九日

釋炙念得生信士　同平六支

寛政四子八月十七日

釋放光妙蓮信女　同　人　妻

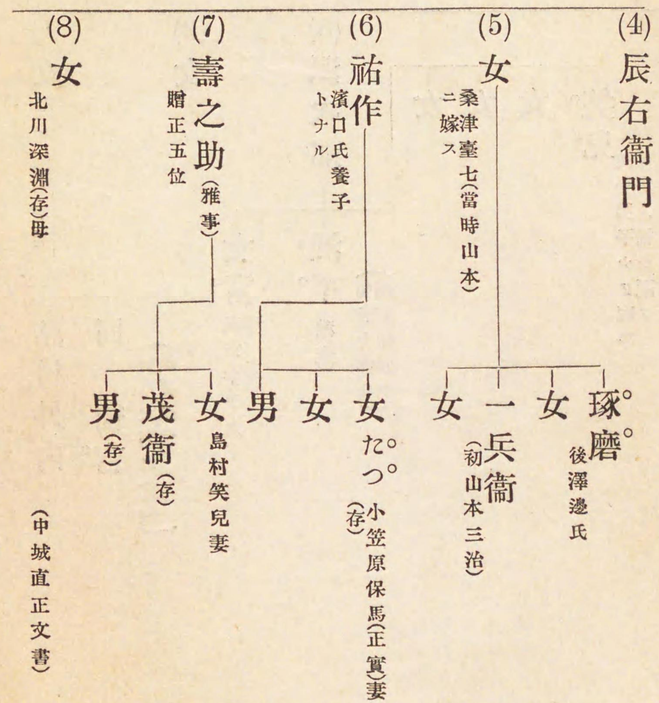
十一代　文化十四丑十一月五日　釋慈光淨臻信士　同　伴右衞門妻
　　文化十酉九月十一日　釋撻齊妙映信女　同　人　妻
十二代　天保二卯三月廿四日　釋願慧成滿信士　同　半　八　妻
十三代　嘉永二酉九月八日　釋頓敎智淳信士　同　半右衞門妻
　　釋智照妙淳信尼　同　人　妻
　　寶曆二酉六月十日　釋秀隆玄心信士　武市半四郎妻
　　安永八亥六月十日　釋正世受生信士　同半助弟彌八郎妻
　　四十五才ニ而卒ス（武市家藏）



- 小笠原嘉助
  - 先妻 赤野包國氏ヨリ來ル
    - 保馬（正實）後忠五郎、和平
    - 妻 島村源次郎弟祐作（濱口氏ヲ嗣グ）ノ女、即武市富子ノ從妹
  - 女 元ハ武市家ノ養子タリシ半平（岡甫助ノ二男）ノ妻タリシカ半平離退後植田氏（醫）ヘ嫁ス
  - 後妻 武市半平太姉

嘉助ト云フ人ハ妻仕合セ惡敷武市ヨリ嫁セシ人ハ五六番目ナリシトカ今繁ヲ厭ヒテ之ヲ記セス

- 島村祐四郎
  - (1) 女 島村壬生平妻
    - 島村外内
    - 同 衞吉（初八太郎名重險 贈從四位）
  - (2) 女
    - 女富（武市半平太妻（存））
  - (3) 源次郎
    - 洲平（雅董）（初壽太郎後四郎、祐四郎）
    - 女
    - 女
    - 女
    - 笑兒（兄洲平男子ナク洲平死後其ノ後ヲ嗣ク）



(中城直正文書)

○安政三年七月 (藩廳ヨリ瑞山ヘ江戸差立ヲ命ズル書)

先達ゟ御内意被仰付置候通り御臨時御用を以て北山通江戸表へ被差立來月七日爰元出足尤參着之上御用間を以て劍術修行方被仰付依之爲御補金七兩被成遣候 (武市家文書)

○安政四年八月十七日 (瑞山ヨリ島村源次郎ヘ)

島村源次郎、瑞山ノ妻富子ノ父

愚筆殊ニ取紛中分り兼候間

そろ〳〵 御推讀奉願候

今十二日八ッ時頃河野信太郎私ヘ己家へ參り申ニハ下槇丁佐刄屋金藏ト申道具屋ゟ御留守居方へ書付ヲ以今月四日夜通ニおゐて狼藉ニあゝ持居候時計ヲ取落しよけ歸り候然ニ右之品(數字不明)之者ゟ借居候品ニ付人ニとふれては(數字不明)殊に根元盗物にて段々人之手おつた(一二字不明)元の盗人い奥州ニおゐて取れ候赴付是非尋不出てい不相成譯ニ付此赴を時計

屋不殘掛合置候處其後土劦藩桃井内弟子山本格馬ト申人右淺草ヱ方へ賣ニ參り候由直樣通達いたし吳候もし御屋敷ニ右樣ヱ御方有之候哉ト問出ておるの琢磨ハ右樣ヱ人でハあれが土藩桃井内山本と申と外ニハあれもしどふあした間違て有ふあと信太郎申ニ付取あへず琢磨を呼にやり相尋候處實ハ私しちやと申事委敷相尋候處實ニ興覺安あらず盗賊追はぎの仕方仍ゐ先腹を切すへき事あと存龍馬大石彌太郎(龍馬、彌太郎、私三人同宿ニ候)と三人色々詮議仕候琢馬ももふ此上ハえんたいを御任せ申ス腹を切のよけれは切如何樣とも仕候事私ともつく〳〵相考候處是非外輪へ掛り殊に盗もの故公儀ゟ詮義掛り居候赴(ママ)に付先右ヱ品も佐劦屋方へ返し内濟ヱ取計ゟ外あしと存右時計ハ龍馬私兩人受取候琢磨は桃井へ歸り此事ヱ決著する迄爾來ヱ通稽古致居候樣申聞かへし申候夜に入(衞吉も呼寄色々詮義仕ル)翌十六日ヱ朝肴代として金子五兩包右ヱ時計とを持テ龍馬半平太兩人右佐州屋方へ參り候處亭主留守ニ付晩方迄相待候へとも不歸女房へ

龍馬、坂本龍馬

島村衞吉

荒增右ヱ次第ヲ咄し候處女房申ハ右ヱ品ハ盗物ゆへ御上ゟ詮儀掛り候ゆへすてたと御屆申上候處只今又明日五ツ時役所へ出候樣さし紙參り誠ニ今でも右ヱ品さへ手ヨ入上ハ又罪もあるくなる只此間内右ヱ品ヱ出る樣ヨ神樣へ御願立計と申て涙を出し女房へ渡し候處亭主歸り候へハ嘸歡ろふと申て泪をおゆし最早日も暮候故女房へ迄内濟ヱ義賴入且明朝參ルニ付亭主扣吳候樣申置歸り候翌十四日早朝參り亭主出合段々内濟ヱ儀賴入候處亭主申ハ昨日女房へ迄御噂ヱ趣承委細承知仕今日御役場出詮儀(ママ)にゐゐ候へとも御屋敷ヱ御名前ハ不申含ニ御坐候乍併役所ヱ方へすてたと屆有之儀ニ付ひらゟ主なくては不成只今ひらゟ主を詮儀ゟたしおしらへ居候場合と申事故私共ゟ右樣なれは物ハ入ても不苦赴(ママ)申念頃ニ賴置歸り居候處間もなく右金藏ト外ニ壹人同道ニテ御屋敷へ參り申ニハ扨ひゆゐ主ヱ儀色々詮儀仕(ママ)候處ひらゟ主ニなつて吳る人無御座ニ付如何仕ふ勿論私も人ゐひろふてくれたと申て御名前ハ不申心得よて候へとももし詮儀(ママ)嚴

ろふ、方言デアラフノ意

て縄手よも掛り候様ゑ事に相成候ては是非ニ不及と申て泪をおぼし申ニ
付實ニ尤至極利ニ詰候故右様かれは仕方なし名前を言ト申て(ひらい主ハ
琢磨取次ニハ龍馬半平太歸し八ッ時頃龍馬私右佐州屋へ參り候處未不歸
相待居候處よふ〳〵日暮頃亭主大よろおひよて歸り御名前も不出又私も
無事ニ相濟誠に々々大歡と申てたゐひよよろおひ先々大安心ニて歸り候
處龍馬と私兩人御目附方ゟ急御用ゑ趣ニて呼ニ參り早速出候處山本琢磨
儀御詮儀掛候ヲ以同列并郷士ともへ御預ケ被仰付候尤琢馬儀品川屋敷へ
(原書缺字)賦被仰付候故當夜召連候様被仰付不安儀ニ候へとも仕方なく屋敷
へ歸り龍馬ト示談ゑ上支度等仕此時夜四ッ半頃ゑ桃井へ參り候處琢馬ハ
どおゐ出候趣にて居合不申仍ゐ私儀ハ目附方へ出其趣屆置桃井へ參り先
生へも咄候處夫ハ先出口々々尋ゐよきと申事よて塾ゑ者不殘取分り板橋
ゑ方品川ゑ方新道(宿カ)ゑ方千ゑもゑ方不殘相尋候へども不知今日ニて四日尋
候へとも一向ゐてどもおし□□□□(不明)來ル十九日迄私とも尋度願□(不明)有之ニ

付夫迄ニ行衛不相分候へは出奔ゑ屆仕心得ニて御坐候
一琢磨ゑ著物其外道具等相改候處なよものも其儘よて有之候只きのまゝ
へ大小をさし出候物よて御坐候
一衛吉も其夜よいの内は屋敷へ參り五ッ頃桃井へ歸り候處琢磨ハ早おら
さつたと申事ニて候又塾ゑ者も琢磨が出た事ハ壹人不知趣にて御坐候
一以藏彌太郎ハ品川へ金をかりに參り夜四ッ半頃ニ歸り内ニ居合不申候
一件ゑ佐州屋金藏ハ到ゐ正直なる物にて江戸よゐめつらしき物ニ御座候
一右ゑ一件ニ付物入ゑ筋色々御坐候間只今迄ハ少々ッゝ御屋敷内よて借
ゐつめ事たらし居申候乍併直様不返ては不成仍ゐ只今外輪ニて借ゐけ
居申候先貳拾五兩ニて荒増事たり申候
一琢磨狼藉ゑ次第ハ今四日ゑ夜田那(マ)村作八と申人ト同道ニて酒をのみ大
醉にて歸りニ往來人へ行ゐたり來ル人々を足がらなとよてかやしなど
致し夫を樂しミ其内件ゑ佐州屋いゆきゐたり取て打つけると風呂敷包

以藏、岡田以藏

をすてゝよけ候由夫ゟ風呂敷包を足よてけとばし箱ふみくだき其儘と
つて歸り候よし是まてゟ醉狂ニ無相違候夫ゟ兩人よて賣工面を時計屋
なと諸方參り候よし其内件之淺草へ參り候處向原ニつく〳〵見て買ふ
と言て直段いたしどふせ金子をもつて御屋敷へ參ル御屋敷ハとこぞと
問れると土佐桃井内山本琢馬と申候よし
一ねつけ時計二ッ壹品ニ付代七八兩ゟ拾兩位之よし其内一ッハおろしや
ゟ渡り物のよしこれが盗物と申事
一右(琢磨のつれ板橋、様の士之)田那村作八と言やつは桃井之内弟子よて安
方塾之者にも毎々ゐやにするやつ琢馬もよくゐてん致し爾來不付合候
處いゐなる事か其夜にゐぎり同道いたし候よし此者ゟ名を不出候故無
事よて御坐候
一深情に世話致し呉候人
町人へ引(合ノ字脱カ)・金子の世話致呉候人　戸部(廉カ)厚平

彌太郎ハ此間出足之筈之處右ニ付延廿日ニハ立筈ニ御座候

大石彌太郎
田中嘉右衛門
日根野辨治
市川元衛
川野信太郎

右大体右之通之次第ニ御座候尚追々委敷可申上尤龍馬近日出足仕筈ニ御
坐候間是ゟ御承知可被仰付候右ニ申上候金子貳拾五兩ハ出來次第藤坂太
平宛よて御差越よて宜御坐候龍馬以藏かとも歸り又私も其内御暇出候事
かいづれ衛吉ハ居申事ニ付(衛吉ゟ向原へ戻す譯ニ御座候)琢磨之行衛も追々は隨分相分候事と奉存候金
子も拾兩計ハもつて居たよふなと申人も御坐候先荒々如此御坐候

八月十七日　半平太

源治郎様

○安政四年十月廿九日（瑞山門弟ヨリ師家へ申立書）

武市半平太

口上扣

一格式白札御宛儀三人扶持御切符七石
一正年貳拾九歳尤只今迄御咎等被仰付候儀無御座候
一天保十二丑年一刀流劔術千頭傳四郎江入門仕修行方相初申候
一弘化二巳年九月七日父半右衞門煩名代勤被仰付候
一同三午年閏五月廿日御番皆勤仕譯を以御褒詞被仰付候
一嘉永二酉年十一月六日父半右衞門跡式無相違家督相續被仰付候
一同三戌年同流劔術麻田勘七殿江入門仕候
但千頭傳四郎儀病死仕候を以如此
一同年右同流初傳被差免申候
一同年自力を以稽古場相構取立方相初申候
一五子年中傳被差免申候
一同六丑年十月廿一日於御目附方御臨時御用を以西國筋江被指立旨被仰付置候所同月卅日右御用御免被仰付候
一同七寅年皆傳被差免申候
一安政二卯年七月九日於御目附方田野御郡方江劔術爲見繕被指立旨被仰付八月七日宿元出足仕九月四日迄同所ニ相詰相手方仕候尤御郡奉行中より御挨拶之上金子貳百疋拜領被仰付候
一同三辰年春桃井春藏弟子共御呼下シ被仰付其砌右面々之藝術於南御會所御覽被爲遊候節半平太儀も右相手方被仰付冥加至極難有仕合奉存候處其節忌中ニ罷在出勤難相調殘念至極之趣ニ御座候
一同年四月廿九日於文武方赤岡御郡方江劍術爲引立被差立旨被仰付五月七日宿元出足同十七日迄同所ニ相詰相手方仕候尤御郡奉行中より御挨

（原註）（貼紙）此度指出處之本紙へ此廉落シ候得共已後のため記置候事

拶之上金子百疋拜領被仰付候

一同年七月十七日御切紙を以先達而御内意被仰付置候通り御臨時御用を以北山通江戸表江被指立來月七日爰元出足尤參著之上御用間を以劔術修行方被仰付依之爲御補金七兩被成遣候

一同年八月七日兼而被仰付置候通り出足仕江戸表參著之上鏡新明智流劔術桃井春藏之方江入門仕最初通ィを以修行方仕罷在候得共博々敷無御座仍而入塾之儀遂御斷右春藏方ゟ寄宿仕申候

一於江戸表

太守様御侍中之劔術

御覽被仰付候節半平太儀も被　召出

御覽被仰付冥加至極難有仕合奉存候

一於同所他所人御呼寄劔術

御覽被仰付候節半平太儀も右相手方被仰付難有仕合奉存候

九月廿八日ハ安政四年

一右師家春藏ニ被召連度々　諸家様御稽古所ゟ罷出殊ニ伊達様仙石様等ニ而も毎々御相手も被仰付候

一同流他流ニ不拘諸師家をも相尋修行方仕候

一於右春藏方流儀皆傳被差免且塾監をも被申付罷在候

一半平太儀兼而も於彼表御暇被仰付候共自力を以詰越奉願修行方仕度存念之趣ニ御座候所不計於宿元極老之祖母中症ニ而大切ニ罷在候旨相聞候上も不得止内情申出御暇被仰付九月廿八日下著仕候儀ニ而存分之修行方相果し不申殘念ニ罷在候趣ニ御座候

一先達而取立方相初候已來も朝ヨリ午時迄も於師家稽古仕午時より晩迄ハ於自宅相手方仕數年之間終日同様修行仕候

右之通幼年之節より只今迄無間斷出精仕殊ニ取立方ニおゐても深切ニ世話方行屆私共一同相競益盛ニ相成只今迄入門之者都而百貳十人餘も御座候將又桃井塾中ニおゐても修行方別而際立盡粉骨候を以新弟子之

身分ニ御座候得共塾監等被申付其上流儀之皆傳等被差免候段畢竟師家之預見込候譯と推察仕候且平常私共見及申候所老祖母ゟ仕方宜若病氣等之節ハ側相離レ不申實ニ寐食(マヽ)を不安看病方仕候儀ニ而內外共屹度私共之龜鑑と相成申候ニ付一同見捨難申御達仕候間厚御詮議被仰付度奉存候

右之趣宜御執成被仰付下度奉願候已上

安政四年　　惣弟子
巳十月　　連印
麻田勘七殿　　（武市家文書）

○安政五年正月二日（瑞山ヨリ戸部廉平へ）

春陽之(有カ)御吉慶不可爲盡期申納候先以其御地愈御安泰可被成御越歳且御留守様御同様目出度御儀ニ奉存候次ゟ私儀無事ニ加年仕候乍憚右様思召被仰付度奉存候舊冬御懇書被仰(脫アルカ)候難有奉存候私も都ゟ御安否等相伺不申大ゟ失敬仕候段御幾重も御仁恕被仰付度奉希候先右年始御祝詞迄申上度早々如此御座候尙期永日ノ時候恐惶謹言

正月二日　　武市半平太　五

戸部廉平様
參人々御中

尙以未殘寒强候間厚くいとひ被成候様奉存候

頓首百拜　　（上田開馬藏文書）

○安政五年四月四日（監察役場ヨリ瑞山へ褒狀）

此節弟子共凡百餘人も有之且他弟子等も拾貳人稽古所へ致出席處自他之差別なく懇に相導候趣相聞奇特之至仍之達御聽一生之中格段貳人扶持被下置候

（武市家文書）

○文久元年七月二日（瑞山ヨリ島村壽之助へ）

例之早筆御推讀奉願候

去月五日御認之尊書相達難有拜讀仕候暑强候處御祖母樣三崎奉初皆樣益々御勇健可被成御座目出度御儀ゟ奉存候隨而私儀無異儀修行居申候仕脫カ乍憚左樣御休意可被仰付候御國許御靜謐奉恐悅候文武館且御改格等之說爲御聞被遣度奉願候江戸も先格別之儀も無御座候尤一両日前虎之御門ニ而御老中松平豊前守樣御籠へ水戸之士壹人切掛否擒ハれ候由此士ハ頗大醉之由如何かゝる事哉分り不申切懸召捕られ候事ハ實事ゟて御座候何分騷ケ敷事ニ御座候扨今日も取紛右迄得貴意度如此御座候尙期重便之時候

恐惶謹言

七月二日　半平太 五

壽之助樣

尙以皆樣へ乍憚よろしく奉願候暑中別而御自愛專一ニ奉存候　頓首

（山崎好昭藏）

文武館文久二年四月四日開館

○文久元年七月十九日（瑞山ヨリ島村壽之助へ）

去月十九日御認之尊書當月十五日相達難有拜見仕候殘暑强候處被成御揃愈々御安泰可被成御座目出度御儀ニ奉存候隨而私儀無事ニ修行仕居申候間乍憚御休意可被仰付候留守內不相變御厄介ニ相蒙り可申難有奉存候尙々宜奉賴上候扨御國許文武館もちとよとみゝ候とカ之事ト申說御座候趣成程最早文武館等御建立等ハ間ニ合申間敷哉如何程立派ニ御作事出來候とて上下人心不帰服よてハ何之やくニも立ぬ事ゟて既ニ大坂御陣屋いかゝも結搆ニ御造營之處纔之御人數詰カ詰ニ候へとも不伏マ、文武共不盛少し乱妨等有之趣右ニ付御目附參り候由承り申候御國ニ居候てハ左程ゟも存不申候處當地へ參り惣分之摸樣且他藩之勢見聞仕候てハ御國之御政事如何哉ト存不安事ニ御座候對州公より先達之御屆書、其餘之咄ハ疾御承知之御事奉存候ト脫カ先日外國奉行小栗豊後守御目附溝口八十五郎對州ゟ帰り其咄承り候處初は牛之事より彌よ起り候よしかの魯西亞船之修覆ニ對州へ入滯留之內近

村之百姓へ牛賣吳候樣異人より相談之處直段壹疋三両おれは賣候樣百姓答ニ致し候處異人夫ハ大ニ下直左樣之牛ゟてはおし壹疋六両ニ買ふと云ゟ付百姓共大ニ其利ゟまよひ内々ゟて數疋之牛を賣候由此事對州役人聞付右之百姓共詮儀致し候處異人とも不時ニ來り牛を盗ミ取或ハ無理ゟ取られ候樣色々僞申出候よし是を役人眞とおもひ夫より對州大おゝりゟて異人へ取てかゝり言葉分らさるより余程ひときめニ致し又異人も大立腹ニて乱妨ニ相成候よし是より付ケ上り對州之地をかし吳候樣頻ゟ申趣御目附溝口八十五郎ト云人ハ此頃引籠候由對州ハ離島故蝦夷之樣ゟ致すといふ公邊之御詮儀以前ゟ有之候由ニ御座候此頃之風説ゟてハ對州ハ最早渠ゟやり候よしニ御座候去月廿九日水戸藩落合庄之助と云もの御老中松平豐前守樣御籠へ切掛ケ被召捕申候醉犯之樣ニ噂有之候處此頃承り候へハ頗る脱アルカ人ゟて自分之存慮公辺へ申説積りゟて策を以右之通被捕候由否御預ニ相成申候當月十二日之夜麻生善福寺へ夜四ッ半頃數人切入かけ候處異人ゟ早く見付られ否彼者ハ一人も不殘逃夫失カ行方不知異人共銃炮頻ニ打大騒ゟて御座候別紙水戸之ゝやり歌老女之歌等御婦人樣方初おちへにも讀て御聞せ被遣度候三崎へも書付共御上ケ被遣度御頼申候御咄も澤山御座候へとも先此頃御見廻御報迄申上度如此御座候尚期重便之時候

恐惶謹言

七月十八日　半平太 五

壽之助樣

尊下

祖母、島村祐四郎妻

尚〳〵御祖母樣初皆樣へよろしく奉願上候殘暑皆樣御いとひ專一ニ奉存候

本阿味ニ月ニ一度づゝ劒會御座候由ニ付來月より參る筈ゟて御座候勢州村正之刀以前より承り居候處此度石山孫六ニ頼詮儀致しくれ候樣申置候處一向不分昨日御屋敷稽古場へ笠井老人參り直々咄承り候處此刀ハ前々

より名高き刀よて是迄度々江戸へ出居候處たゝると申事よて始終元へ帰る先正宗と申様之出來よて長貳尺五寸餘も有之申事ニ御座候此頃些出すが六ヶ敷と申事あれとも頼置申候是も見ねハ不分事あれとも耳よりよて相樂しミ居申候本阿味(マヽ)ハ目くらへひよおちずよて札を入る積りよ御座候追々御咄し可申上候　頓首

（山崎好昭藏）

○文久元年八月（瑞山以下同志ノ盟書草案者ハ大石圓（彌太郎）ナリト云フ）

盟　曰

堂々たる神州戎狄の辱しめをうけ古より傳はれる大和魂も今は既に絶えなんと　帝は深く歎き玉ふしかれども久しく治れる　御代の因循委惰といふ俗に習ひて獨りも此心を振ひ擧て
皇國の禍を攘ふ人なしかしこくも我が　老公夙に此事を憂ひ玉ひて有司の人々に言ひ爭ひ玉へども却てその爲めに罪を得玉ひぬ斯く有難き御心におはしますをなど此罪には落入玉ひぬる君辱かしめ受(イを)る時は臣死すと況(イむ)てや
皇國の今にも衽を左にせんを他にや見るべき彼の大和魂を奮ひ起し異姓兄弟の結びをなし一點の私意を挾まず相謀りて國家興復の萬一に稗補せんとす錦旗若し一とたび揚らバ團結して水火をも踏(イま)むと爰に
神明に誓ひ上は
帝の大御心をやすめ奉り我が　老公の御志を繼ぎ下は萬民の患をも拂はんとす左れば此中に私もて何にかくに爭ふものあらば神の怒り罪し給ふをもまたて人々寄つどひて腹かき切らせんとおのれ〳〵が名を書きしるしおさめ置ぬ

文久元年辛酉八月

武市半平太小楯

以下連署血判

（瑞山會文書）

土佐勤王黨血盟者姓名簿の寫

武市半平太	小楯血判（以下同）
大石彌太郎	賜死屠腹贈正四位 元敬
島村衛吉	後圓特旨從五位 重險
間崎哲馬	獄死贈從四位 則弘
門田爲之助	賜死屠腹贈從四位 毅
柳井健次	友政
河野萬壽彌	禁門變戰死贈正五位 通明
小笠原保馬	後子爵敏鎌 正實
坂本龍馬	京都ニ刺客ニ斃ル贈正四位 直陰
岡本恒之助	俊直
川原塚茂太郎	戊辰ノ役戰死贈正五位 重幸
上田楠次	元永
弘瀨健太	年定
多田哲馬	則孝
曾和傳左衛門	正直
島本審次郎	仲道
中岡光次	爲鎮
島村壽之助	壽榮
吉井茂市	則行
望月清平	彌鹽
土方楠左衛門	久元
小畑孫三郎	和
安岡實之丞	正方
島村壽太郎	雅董
吉本善吉	守成

奈半利磧ニ刑死贈從五位

後管野覺兵衛

後田所壯輔贈從四位

高橋牛之助　介吉
鎌田菊馬　張楯
吉田省馬　篤明
山本三治　重時
石川喜久馬　義秀
依岡權吉　弘毅
宮田賴吉　貞亮
森脇唯次郎　重成
千屋寅之助　孝訓
濱田清藏　正敏
仲彥太郎　正幹
谷疇太郎　恒誠
岩崎馬之助　維慊

大坂ニ闘死贈正五位

刑罪贈從四位

後正存

檜垣清治　度會正路
村上保次　守行
藤本駿馬　正和
千頭嘉源次　重固
大利鼎吉　正義
宮崎勝藏　保之
北代忠吉　恕
三瀨八次　峻明
村田忠三郎　克復
田所助次郎　元晶
小畑五郎馬　敏行
池田卯三郎　義道
島地磯吉　義石

吉松恒吉　恒敬
野々村庄吉　利敬
沖野平吉　信篤
尾崎幸之進　直吉
田所莊之助　愛敬
志和寅之助　履
岡田啓吉　宜稔
小松熊市（イ吉）　樂盛
伊藤四十吉　弘長
土居左之助　金英
中島與市　光尹
安岡覺馬　正愼
山本四郎　義忠

禁門ノ變戰死
贈正五位

贈從五位

大和義擧後刑死
贈正五位

山本兼馬　正義
田口文良　明正
岡野佐五郎　義正
伊藤甲之助　和義
田岡祐吾　正路
平石六五郎　雄
西山直次郎　盛城
小川平馬　善道
楠本文吉　安茂
岡崎山三郎　茂樹
上田官吉　正秋
中城益四郎　政信
石川潤次郎　正之

贈從五位

禁門ノ變戰死
贈正五位

後志澄

鬪死贈正五位

贈正五位

佐井松次郎　正民
板垣寛之助　高幸
島村源六　義路
中澤安馬　正和
南部展衛　忠成
千頭小太郎　久胤
宮川助五郎　長春
粟井兎之助　正穗
白石馬之助　盛忠
秋澤清吉　貞道
安岡權馬　正德
矢野川龍右衛門　爲雄
尾崎源八　忠治

毒ヲ仰テ自殺
贈從四位

濱田良作　秋登
田内衛吉　茂稔
深瀨鐵馬　和直
吉永良吉　正則
三宅謙四郎　幹正
田中作吾　茂藝
村田右馬太郎　有尙
村田角吾　貞宜
公文藤三　景高
武政左喜馬　定敬
中村惠三郎　義直
中平菊馬　定純
長尾省吾　直行

天王山ニ自殺
贈從四位

美作國土居ニ
屠腹贈正五位

觀音寺智隆
山崎喜藏正良
千屋菊次郎孝健
今橋權助重泰
千屋金策孝成
谷脇清馬修彛
高橋俊助重利
片岡左太郎正雄
海路十寸吉安行（イ敬）
戸梶直四郎泰敬（イ行）
竹村猪之助敬義
山崎廣馬正義
片岡盛藏實純

池田屋ニ闘死
贈從四位

奈半利磧ニ刑
死贈正五位

奈半利磧ニ刑
死贈從五位

奈半利磧ニ刑
死贈正五位

北添佶馬正信
江口參太定長
中村左右馬政茂
片岡團四郎好直
中平喜之助忠治
中平大治忠表
市川長（イ辰）三郎祐成
今橋武之助重昌
西田可藏共治
近藤龜彌爲美
宮田節齋秀貫
和食牛馬龍虎
安岡斧太郎直行

美作國土居ニ屠腹贈正五位
後伯爵田中光顯
後井原昂

後滋
後大橋愼三
後男爵片岡利和

上田蜂馬　元春
川久保健次　成清
井原應輔　德道
濱田辰彌　光正（イ爲）
岩神主一郎　正路
鳥羽謙三郎　勝益
下方彌三郎　範爲
中山刺擊　光儀
古澤迂郎　光迂
橋本鐵猪　有藏
土方左平　直行
那須盛馬　利和
堀見久庵　輔勝

奈半利磧ニ刑死贈從四位

後男爵美稻
刑死贈從四位
天王山ニ屠腹贈從四位

奈半利磧ニ刑死贈正五位

清岡治之助　正道
阿部多司馬　正幸
小畑孫次郎　綽裕
久松喜代馬　重和
松山深藏　正夫
田邊豪次郎　義温
高松太郎　清行
柏原禎吉　義勝
筒井米吉　清興
五十嵐幾之助　敬正
佐井寅次郎　忍石
川田貞七　正敏
堀內賢之進　直正

山本喜三之助（進カ）　重孝　屠腹贈從四位
平井収二郎　志敏　贈從五位
森　助太郎　爲政
森田金三郎　維種
中平保太郎　定晴
三原兎彌太　正亮
岡本八之助　忠保　刑死贈從四位
上田宗兒　則正　戊辰ノ役戰死贈從四位
坂本榮十郎　忠光
浪越肇　宗義
服部東藏　雅世
川田乙四郎　義德
吉本平之助　祐雄

楠瀨六衞　直樹　戊辰ノ役戰死贈正五位
都賀田文八　茂穗
安岡覺之助　正美　禁門ノ變戰死贈正五位
上岡膽治　武雄
弘光明之助　利條
田所駒吉　元道
岡甫助　澄明
島村左傳次　雅文　天王山ニ屠腹贈正五位
西山平馬　秀幸
池知退藏　重胤
安東眞之助　好成
島村外内　重正
岡本猪之助　正利

大和鷲家ニ關死贈正五位
贈正五位

以上百九十二人

〔參考〕 按するに右加盟の手續に及びし者は彼の文久三年亥の二月武市瑞山が京師に

安岡金馬　忠綱
足達行藏　貞正
細木核太郎　榮敦
楠目民五郎　正幹
一瀨源兵衞　正藩
岡本瀧馬　元貞
森下幾馬　茂晴
宮地宜藏　正覺
山田三藏　房清
庄村良達　正房
西村廣藏　治家

於て容堂の前に盟書を提供せる以前に止れるものゝ如し而して其の平井坂本中岡等多く舊譯者くは舊名を用ゐてある所は最も史證たるの價値を有す唯吉村寅太郎の名なきは其の早く脫藩せる際に之を削りしものなるべく池内藏太も亦然りしが如し又大石團藏安岡嘉助那須信吾の三人を除きある理由は全く吉田暗殺事件の累を避けんが爲めなりき卽ち亥年二月中に草せる上岡膽治歸國の日記に據りて明白なりとす

（瑞山會文書）

島根英吉ハ島村衞吉ノ誤

○文久元年八月廿八日　（樺山三圓日記ノ一節）

二十八日曇

土州の藩武市半平太島根英吉同伴被參候此内より武市氏の事承及候處初て面會健なる人物と相見得武術師範の由彼是の咄にて八つ前に歸られ候事

（瑞山會文書）

○文久元年九月　（久坂玄瑞ノ瑞山ノ描ケル墨竹ニ題スル詩）

江月齋遺稿ニハ題武市半平太畫竹送其歸土佐半平太將有所論

挺立山巖竹數竿　故人心事畫中看
男兒再會期難得　唯喜清風襲座寒

（武市半太藏）

清風駁百尺掃空難石上蟠根鞭且蟠進蟠而故人唯憲須苦節畫中看人

○文久元年九月二日（久坂玄瑞ノ瑞山ノ描ケル墨竹ニ題スル詩）

別時何必說平生　畫竹贈吾無限情
從茲白露金風夕　獨對此君斟酒觥

題武市君所贈竹言別辛酉九月初二日也

長門日下誠

（伯爵田中光顯藏）

○文久元年九月七日（樺山三圓ヨリ瑞山ヘ）

愈御壯剛御道中無御障御安着之趣大慶奉存候隨而小子も御別袖後相替不申來る十九日發足之積御座候偖御立之砌に者居宿いたし御待合申候處多分御延にも相成候欲と一寸外出致直ニ歸申候處最早御立寄被下候段承知仕實ニ殘念千萬に存候是非々々拜面仕度考に御座候處誠ニ以遺憾至いつゝ亦々拜顏を得奉候節も可有御座候得共猶亦其內文通可申上候付左樣御含置被下度旁之儀も追々可申上候實以暫時計之御拜面に付甚遺恨に奉存候別章御願上奉り候用向のみ如此御座候草々謹言

九月七日　樺山三圓

竹市君侍史

（田岡正枝藏）

○文久元年九月十五日（瑞山ヨリ島村祐四郎ヘ）

一筆啓上仕候秋氣深相成候所愈御安全可成御修行且御留守御同樣目出度奉存候扨野生儀無異儀尤當今之時勢考合候へば最早落合て修行致す事出來がたく右に付當月三日江戸表出足を以東海道通り今日著阪致候尤衞吉

島村祐四郎後ニ壽太郎ト改ム始ノ名ハ雅董後ニ洲平、瑞山ノ配富子ノ弟、

衞吉島村衞吉

も同道にて御坐候巨細の儀は追々得貴顔御咄可申貴君も近々の中御歸國被成候ては如何に御坐候哉と相考申候其御地にては當時の模樣は如何の取沙汰御坐候哉江戸表にて諸方の模樣承り候ては實に世之中もさしつみ之樣に御坐候先づは鳥渡一應之御左右迄得貴意度如此に御坐候恐惶謹言

九月十五日　武市半平太

嶋村祐四郎樣

野生抔は兼而御咄申候通兩三年も江戸表に相詰居候舍に御坐候所何分落合不申に付俄に歸國仕居申候尙々御考慮可被成候

（田岡正枝文書）

○文久元年十月中旬（福岡藤次覺書）

右半平太申出之大意將軍家王威ヲ蔑如シ却而夷人を親睦且姦計を以　和宮樣を奉迎等之儀有之より薩長二藩力を戮せ義を擧げ　和宮樣御下向の期ニ先達て事を發し候色相顯れ別而長藩にては誰某々等必死之擧動時々相見え且薩長より御國を同志と見附候樣に有之第一容堂樣御起居及小南五郎右衞門儀成行を被相尋候段申出しに付右等動もすれば書生の釀成し候說にて容易に信用いたしがたく縱令其實ありとも於御國は猶更是等に動搖致し萬一又々御隱居樣御首尾ニ御關候樣相成候ては不安次第ニ付其方等も容易に發言致し人心を煽動致候儀無之樣相心得尤官府へ申出候儀は如何樣あり共不苦且つ又他國の風聞新に承り候はゞ時々可申出と申聞候（下略）

（子爵福岡家藏）

○文久元年十二月（瑞山山本喜三之進大石團藏ノ二人ヲ長藩ニ遣スヤ久坂玄瑞ノ賦シテ二人ニ贈レル詩）

辛酉臘月土佐山本大石二君來遊萩府將去作詩爲贈

葛長旄丘心事違　包胥何意等閒歸
送君郊外歲將暮　氷滿髭髯雪滿衣

（江月齋遺稿）

○文久元年十二月廿一日（久坂玄瑞ヨリ瑞山へ）

毫末なから御同志中へも宜御鳳聲可被下此後は逐々御書狀御往復仕度候

大石山本二君御來遊にて承り候處其後益御清榮被爲在候段奉大賀候僕十月十二日歸國仕候百事齟齬碌々眠食不仕候段御愧敷事に有之候さては京都も御緣組相濟み天下之大事去り申候浩歎千萬奉存候尊藩御事も二君より承候處何共御苦心之段奉察候敝邑も委靡至極にて二君御來遊之御思召通にも相叶不申面目も無之次第に御座候僕等一兩輩友人共申樣は諸侯賴むに足らず俗吏依るに足らずと存じ候之を賴み之に依る樣にては迚も天下に裨益する事は相叶まじく此節者仕方無之樣に存じ候也折角二君御來遊を幸に政府の因循打破度存候得共夫にても徹底仕らず殘念之至なり二君明朝薩を指し御發行に相決申候彼藩も矢張別段之快事も有之間敷と存じ候二君も屹と確乎不拔之御議論無之ゐ者迚も御志通に相成申間敷欲御氣遣申上候何も草々如此

（御緣組相濟ハ和宮降嫁ヲ云フ）

十二月念一夜　久坂玄瑞

二白　折角御厭申も疎に御座候嚴寒風雪之折柄二君遠路態々御來遊何共奉感佩候然る處御志通にも相成申兼何共御氣毒千萬に奉存候併し役人共に關係せぬ事にて僕等友人中にて御相談被下度事も御座候得者何時被仰越可被下如何樣にも熟考仕可申奉存候已上

委曲の事は二君より御聞取可被下候

武市半平太樣　玉案下

土州樣御家中（上包ニ）

武市半平太様

六十

久坂玄瑞

（瑞山會文書）

○文久二年正月廿一日（久坂玄瑞ヨリ坂本龍馬ニ托シ瑞山ニ贈レル書）

其後ゑ如何被爲在候や此内ゑ山本大石君御來訪被下爲何風景も無之御氣毒千萬奉存候最早御歸國ならんと御察仕候此度坂本君御出浮被爲在無腹臓御談合仕候事委曲御聞取奉願候竟ニ諸侯不足恃公卿不足恃草莽志士糾合義舉の外ゑは迚も策無之事と私共同志中申合居候事ニ御座候乍失敬尊藩も弊藩も滅亡しても大義あれは苦しからず兩藩共存し候とも恐多も皇紬（マヽ）綿々

萬乘の君の

御叡慮相貫不申而ゑ神州に衣食する甲斐ハ無之欲と友人共申居候事に御坐候就ゐハ坂本君ニ御申談仕候事とも篤く御熟考可被下候尤モ沈密を尊ぶは申迄も無之候樺山よりも此内書狀來る彼藩も大に振申候よし友人を一兩日内遣す積ニ御座候様子次第尊藩へも差出可申と存申候何も坂本様より御承知ならんと草々亂筆推讀是祈敬白

正月念一

時氣御自保申も疎に御座候已上

日下誠

（田岡正枝藏）

武市先生

○文久二年四月（周布政之助大石彌太郎ヲ贈ル詩）

上締親姻下會盟　且欣攝海共連營

畿南縱有蠻船到　不許腥塵汚帝京

大石盟兄將帰土佐賦之以送併正周布君再拜

（西田鎌太郎藏）

親姻ハ、毛利慶親ノ養女喜知姫ノ山内豐範ニ嫁スルヲ云ヒ會盟ハ、長土會盟ノ同盟ヲ云ヒ土連營ハ、當時土佐ハ住吉ノ長州ハ兵庫ノ衛戍ヲ命ゼラルヽヲ云フ

一本假名ヲ平假名送リトナス

文久二年十月七日文久三年正月廿九日那須信吾書翰參照

○文久二年四月八日（吉田元吉梟首ノ罪狀書）

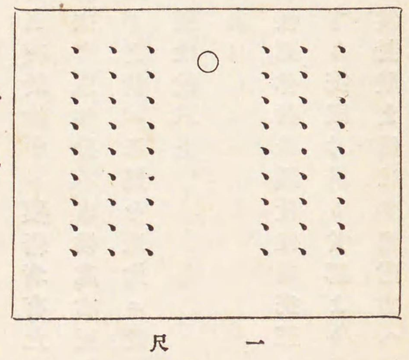
此元吉事重キ役義ニ有ナガラ（イ在）心儘成ル事を取行天下不安時節ヲモ不顧一日モ安氣ニ暮度所存ヲ以御國次第ニ御窮迫之御勝手ニ相成候モ乍悟表ハ御餘銀モ有之候樣都合能申飾リ既ニ先年ヨリ御圍ヒ相成居候精米追々存分摺盡シ御國內御寶山不殘切拂何ニ不寄下賤之者ヨリハ金銀嚴敷取上御國民上ヲ親ミ候心ヲ爲相隔自分ニヲイテハ賄賂ヲ貪リ無類ニ驕ヲ極メ於江戸表輕薄之小役人へ申付御名ヲタバカリ結構成銀之銚子ヲ相調且自己之作事平常之衣食住彌花美（イ華）ヲ極メ候事モ此儘差置候テハ士民之心彌相離レ御用ニ立候者一人モ無之樣相成御國滅亡之端トモ相成候ニ付不肖之我輩共無餘義堪忍難成上ハ國患（イ患ヒ）ヲ下ハ萬民之艱苦ヲ救ン爲メ己之罪ヲ忘レ如此取行ヒ尙又サラシオクモノ也

（戊）四月

（端山會文書佐々木高行日記ニ據リ校訂）

○文久二年四月八日（吉田參政暗殺聞書）

雁切ニ差置有之首へ如是扎付有之



（中城直正文書）

○文久二年四月九日（吉田元吉親戚ヨリノ届書落首等）

袖扣

吉田元カ本吉

右者昨八日之夜於途中ニ狼藉者有之及乃傷相果申候故早速右狼藉者尋方仕候得共逃去今以相分不申候處右死骸其儘差置候之義御作法ニ御座候得共源太郎父子之情ニ而屍を道途ニ置居候儀難忍不得止自宅ゟ取寄御座候源太郎後正春

ニ付此段御届仕候以上

四月九日　百々幸彌

原註　檢使御取次長瀨八馬

先刻御届仕候死体猶詮議仕候處疵三ヶ所之内肩疵長五寸深二寸開壹寸五歩右之腕かすり疵四寸計り首腮より放行衞相分不申候處雁切川ニ封狀相添有之取寄候封狀之儀は御目附方へ早速差出し申候以上

（○右封書ニ而も無之罪文板ニ記シ有之趣）

月　日

右遺家同月廿日之夜斷絶ニ被仰付候

吉田次郎左衞門

（土佐人筆記）

○

なゝ物はくし

凡土國になゝ物つくし多中にをこんとはたんとなゝ

惣分御主から留てかなゝ

文武のやかたゝ行人りなゝ

やかたの高下わとゆふがなゝ

輕物ゝはやすみりなゝ

夫でゆさきゝ御出あなゝ

處々の樂書ハ主りなゝ

役目の御人衆おさとりなん
きおらでやぶさねや云よふりなん
きれやおきき御役目御首りなん
方々坏（マヽ）せど有所りなん
御腹の立とも云みちゞなん
むごんと一口言人ゞなん
とふから止たら言事なん
せけんのねたみも際限なん
おんな騒動今迄なん
御國はこれではおさまらなん
古來の御心配云人がなん
新手をするのをとてつゞなん
跡役さはもり云よふのなん

後日の御役目（マヽ）え付がなん
國中さはぱり
きこらて下々をうるそふなん
ない物を只仇口作り立めをたな事云物てなん　（土佐人筆記）

○

一四辻のアカヲ染　木綿物大安うり
一首ハ雁切サラシ木綿
一女夫カ遠足アノ世木綿
一跡ハ斷絶ニ鳴海絞り
一氣味カヱヽと結城縞
右品々卯月八日夜より切賣致シ申候外ニ色のさめた江戸紫品川邊ニ押込
御坐候得共是亦近々大名筋ゟすがやして近日世ゟ出し可申候間多少不限

御用向之程奉願候

賣捌所土州高知
帶屋丁右衞門
（土佐人筆記）

此ノものが悪ハ「取ふ出ぬ」ものが今やまつた役人ト吉田の相手ト吉田の相手ト上二行の如く下二行に讀ムベシ

今やまつた役人ト
吉田の相手
西御邸の御作事ト
島村左五郎
吉田の石突ト
浦々御分一
川合純郎
文武館
御留守達の交代ト

取ふ出ぬ
ものが
浮雲加減で
仕合の能きものが
歡ふく
居る物が
五月雨通して見ね
ど分らぬものか
都合の拔ヽ

野村の女房
櫻馬場と
御場所止り役人
是から向キの御勝手ト
北の口の御奉行
雨森と
御北の御老女
櫻馬場の玉向キト
市原八郎右衞門
大手筋改易ト
半知御借上
植疱瘡ト
古格御役人

後のが
治り付ぬ
ものが
六ケ舗
ものが
追付運の開る
ものが
氣の惡い
ものが
辭ヤト言とぬ
ものか
せねばならぬ
ものか

○

日本無雙　奢落し藥

一此藥誠忠之時鳥を主藥として蘭方を交ぜず漢方專らとして調合をせしむるより四月八日甘茶を以服す時も如何なる叛逆大望の頭を落し又御奉行御仕置御目付其外小役人なりとも一身役位を震う者と云らさる事なし一國の動氣を靜め米穀を安ンし足の輕をはし一念の季をはし紙蠟燭の病を直し改正等相發事を暫く昇進する事なし逆政を治め兩格とす毋も良劑なり此藥水道本町邊ニ近年紛敷毒藥出し候間能く々々御吟味之上御求め可被下候

本家調合所　西大門ニ而　安房館製

此藥ハ天竺釋迦如來へ御夢報ニ而弘法大師歸朝之後土佐國長濱雪溪寺月曉に相傳有之西田衞門の狸申出候事我等先數輩　御先代樣前より住居ニ候所武家之御方にハ引料家地等相當候得共我等畜類とは乍申有性ハ何之沙汰無之伐剝退所無之恨ヲ含ミ申候

狂歌ニ

渡邊のかとて取たる鬼の首
けものゝ里の恨み成りゝり

四月八日題

料理しゑなを見よ行や初鰹
鳴ても云れぬ首打（キュエ）のゆきさた
ゑい捨てか云らを
とるや初鰹

○文久二年四月十一日　（山内豐譽ヨリ瑞山へ）

山内豐譽兵庫
又民部ト稱ス
豐信ノ弟ト資性
謹厚勤王ノ志
深ク心ヲ傾ケ
テ瑞山等ヲ庇
護ス

包紙奉書

律詩一首

此包紙ノ中ニ左書ノ文書入紙ハ通常ノ白紙ナリ

又宛名モナシ

一只今一等（マヽ）、必死相極及傷よも相成候勢之由然るよ今取手參り候とも先心
靜よ縛ニ就相待候得者直ニ刑儀定候譯ニモ有之間敷又我々屹度力を盡
し一時よ打潰（イヽ）し可申ニ相定候間先左様相心得候が至極忠義ニ相當り候
乎と存候

四月十一日　民部

覺

此分モ亦奉書ノ包紙ニテ黃色ノ紙ニ左ノ文書認有之之ニハ日附モ宛名モ都テ何よもなし

○文久二年四月十一日　（山内豐譽ヨリ瑞山へ）

少將樣ハ山内豐資

取手先暫延引ニ相成候樣先刻少將樣へ言上ニ相成候ガ只今形勢如何内
々氣を付可申來候　（武市家文書）

『明治十八年八月五日　（山崎愼三ヨリ田中光顯へ）』（參考）

拜啓時下炎暑難耐候處益々御靜榮可被爲在御從事奉拜賀候降る鄙生
兎全御放懷相仰申候陳ハ先般於御地御契申上候歷史材料取纏主任之

嶋村壽之助明治十八年七月廿日歿ス

古澤氏、古澤滋愚叔、瑞山ヲ云フ

義嶋村翁長々病氣終ニ死去候樣ノ都合ニテ今以テ誰トモ相定リ不申其内過日出高致候ニ付猶嶋村笑兒等ヘ引合候處同姓ノ不幸一條相片附候ヘハ二三ノ同志者ニ計リ撰定可致段申立居候ニ付不日相定リ申スヘケレハ其上ハ早速御報道可申上候此段御了知相願上候偖豫ネ古澤氏詮議致居候牛邸公子帶屋町一條豫知云々ノ件過日其証ヲ得候ニ付指上申候古澤ヘ御都合モ候得ハ御廻送相願申候

過日出高中一日武市ニ到リ愚叔常ニ相用居候懐中物ヲ改メ見ルニ律詩一首ト表書シテ最嚴ニ奉書ノ紙モテ包ミシ物有之披テ之ヲ見ルニ詩ハナクテ別紙寫ノ如キ短簡有之又同シ紙ノ包ニ覺ト表書セシモノ有之之ヲ見ニ別紙寫ノ如キ書類ナリ此分ハ黄色ノ紙ニ認有之卽當時ノ御用紙ナリ依テ思ヘハ之も亦同公ノ許ヨリ發セシ候モノ欤右二片ノ文面ニテ十分彼公子豫知セシヿハ明瞭ナランカト相考申候猶別紙御熟讀ノ上御賢考ヲ乞

身前ヱ義ニ付過般東村迄仰聞セレ候都合同人ヨリ承知仕候誠ニ深情ノ段肝銘ヱ至深奉拜謝候實ハ過日ノ場所ハ豫テノ希望トモ異ヒ豫期セサル事故心事決兼候義有之其赴東村迄申遣申候猶又此上不惡御配慮ノ程相願申候時下炎威裸体モ不耐別ゐ御自愛專一ヱ御事ニ奉存候先も右迄書外期後鴻候也　誠恐々々頓首拜

八月五日　山崎愼三

田中光顯樣

玉案下

（瑞山會文書）

『明治廿年四月（生原重周覺書）』（參考）

武市先生其他八十余人ノ紀年碑ヲ土佐國五臺山之麓ニ建設既ニ成ルト聞ク曩キニ予モ醵金ノ一部ニ關ル故其工事ニ係ル決算書ヲ井出君ヨリ予ニ示サレ其盛大ナルニ驚キ過キシ昔ヲ追想シテ始テ斬奸ノ談

話ニ及ヒ予ハ最モ其機密ニ關リシモ故アリテ未タ人ニ吐露セザリシガ其實ハ云々ト語リシニ井出君曰今日ニ在テ何ノ憚ル所アランヤ此頃同志者東京ニ在テ武市氏ノ履歷書編纂ス其書畫遺蹟ニ至ル迄集緝シテ遺スヿナシ兄其顚末ヲ記セヨトノ需メニ應シ大略ヲ左ニ記ス

井出正章

文久二年ノ頃予ハ山内民部公子（容堂公ノ四弟ナリ）ノ近習場ヲ勤メシ頃執政吉田元吉大ニ改革ヲ行ヒ國政ヲ左右スルヿ如意權威一人ニ歸シ衆皆畏懼セサルハナシ此時ニ當テ武市先生京師ヨリ歸リ始テ尊攘ノ說ヲ唱ヘ慷慨悲憤同士ヲ募リ吾藩薩長ノ義擧ニ後レンヿヲ憂ヒ屢政府ニ說クモ容レラレス執政吉田元吉佐幕論ヲ唱ヘ君側ニ在ルヲ以テ如何トモ爲ス能ハス千辛万苦止ムヲ得ス斬奸ヲ行ヒ國是ヲ一定シテ他日大ニ義兵ヲ擧ケンヿヲ窃カニ正義ノ士ニ謀ル爰ニ山内兵之助（南邸）同民部（東邸）兩公子ハ正義ニシテ殊ニ民部公子ハ頗ル英邁ノ聞アリ當時ノ權臣ヲ厭フト岩崎馬之助（兵之助公子ノ教授ヲ勤ム）公子ニ說ク同公子ヨリ之ヲ民部公子ニ

山内民部、名ハ豐擧容堂ノ弟

山内兵之助、名ハ豐積容堂ノ弟

告ク公子大ニ武市先生ノ意ヲ贊シ共ニ奸臣ヲ攘ハンヿヲ勉ム一日武市先生予カ家ニ來リ曰時大ニ迫ル薩長夙ニ勤王ヲ唱ヘ遂ニ討幕ノ論既ニ決ス吾藩時機失ス可カラス然リト雖モ奸物君側ヲ擁シ吾言固ヨリ容ラレス却テ禍害吾黨ニ及ハンヿ必セリ故ニ止ムヿヲ得ス事斬奸ニ決ス君今民部公子ノ許ニ勤ム宜シク努力ス可シ予之ヲ諾シ感慨死ヲ以テ誓フ翌日東邸ニ赴キ窃カニ公子ニ說ク公子予カ心ヲ疑フテ實ヲ言ハス予頻リニ切論止マス前日武市先生予カ家ニ來リ與ニ死ヲ以テ誓ヒシヿヲ述ヘ漸クニシテ心解ケ或ハ云フ古來機密ノ漏ルヽハ多ク閨房ノ内ニアリ戒心セサル可カラス抔ト談話時ヲ移シテ退キ英敏ニシテ且沈毅ナルニ感シ同志中最モ望ヲ公子ニ歸ス其後亦先生予カ家ニ來リ曰ク斬奸ノ機會未タ至ラス只恐クハ藩主發駕（此ノ時江戸參勤ノ令アリ）ノ期日迫ルト予曰其機會ヲ探知スル如何曰執政ノ若黨ニ懇意ナル者同志中ニ一人アリ故執政ノ動止時々知ルヿヲ得ト談時ヲ移シテ去ル後四

月六日先生予カ家ニ來リ云フ天幸既ニ至ル明夜君公終會ヲ催ス執政則チ侍カ待講ニ當ルト實ニ好機會ヲ探知セリ計略既ニ整フ其任ニ當ル者ノ外ハ誰モ知ラス果シテ遂ケ得タル上ハ君側ノ奸臣ヲ除クハ偏ニ公子ノ盡力ヲ仰ク君努力セヨ果シテ脫カ先生ノ言ニ違ハス翌八日朝市中皆言フ吉田元吉斬セラルト大ニ狼貶狼カ上下騷擾探索至ラサルナシ同九日ニ至ルモ奸臣退カス探偵益密ナリ有志輩大ニ疑ヒ若シ奸賊ノ手ニ縛セラレンヨリ寧ロ脫走スルニ加カスト議論沸湯同十日未明予カ門ヲ叩キ來ル者ハ楠瀨六彌ナリ其容貌ヲ看ルニ旅粧ナリ曰ク武市先生ノ使ニ來レリ事切迫委細ハ武市先生ノ書翰ニ盡セリ直チニ東邸ニ出テ盡力アランヿヲ乞フト書翰ヲ投シ去ル此ノ時予兩親ノ嫌疑ヲ受ケ書翰ヲ披ク能ハス窃カニ屋後ニ至リ披封ス其大意ニ云フ斬奸後既ニ若干ノ時日ヲ經ルモ奸臣依然タリ政府未タ改革ノ令ヲ發セス探偵彌密ナリ有志輩大ニ沸湯既ニ破レントス寧ロ賊手ニ縛セラレンヨリ早ク

奸ヲ攘ヒ脫走スルニ如カスト衆議一決ス軍貝ノ一聲ヲ待テ愛宕山ニ勢ヲ揃ヘ襲ヒ來ル賊ヲ破リ京師ニ走ラントス實ニ危窮存亡ノ秋一髮千鈞ヲ曳クカ如シ公子宜シク吾輩ノ赤心ヲ憫カムナラバ寸時モ早ク奸臣ヲ攘ヒ正議ノ臣ヲ擧ケンヿヲ切望ス君直チニ吾書翰ヲ以テ公子ニ告ケヨ云々讀終リ吃驚卒カニ書翰ヲ携ヘ東邸ニ赴ク公子寐ニ在リ未タ起クス故ニ具サニ切迫ノ事況ヲ書シ老女ヲ以テ封書ヲ奉ス暫ク在テ公子予ヲ召ス予先生ノ書翰ヲ出シ事實ヲ告ク公子大ニ驚ク稍在テ岩崎馬之助南邸ヨリ馳セ來ル曰勢已ニ迫ルト予公子ニ告ク公子忽チ一書ヲ草シ予ニ與フ其大意ニ云フ假令賊手ニ陷ルトモ縱容縛ニ著ケ敢テ疎暴ノ擧動アル可カラス他日正奸ヲ正スハ吾等カ任疑フ可カラスト予之ヲ馬之助ニ與フ馬之助馳テ武市先生ニ與フ大ニ歡ヒ涙ヲ垂レテ之ヲ受ケ有志ニ示ス有志尙馬之助ノ策カト疑フ生先生衆ヲ叱シテ曰決テ疑フ可カラス衆漸ク鎭マル暫在テ民部公子書ヲ大學公子邸追手

山内大學名ハ豐榮豐信ノ父豐資ノ弟

土佐守豐資致仕景翁ト稱ス

及家老山内下總ニ送ル予使者ノ任ヲ勤ム下總ニ面會シ焦眉ノ急ヲ告ク下總曰到底下手人ヲ活スヿ難シ所謂大石藏之助ノ如キ忠臣モ尚且如此其ヨリ大學兵之助ノ兩公子及家老山内下總同深尾丹波東邸ニ來會ス大學公子曰事穩密ニ謀ルニ加カスト同公子ヨリ北邸御隱居（後景翁ト稱ス）ニ與向ヨリ書ノ往復再三ニ及フ漸ク十日（脫カ）ノ夕方ニ至リ政府改革ノ令ヲ發シ時ノ奉行職深尾弘人執政由井猪内大目附市原三郎左衞門（八郎右カ）等其他ノ權臣盡ク退ケラレ山内下總奉行職ヲ命セラレ深尾丹波近習家老ヲ命セラレ平井善之進（烝カ）執政トナリ小南五郎右衞門大目附トナリ漸ク鎮靜ス其後ノ沿革ハ人皆知ル所ナレハ此ニ贅セス

明治廿年四月記ス

生原　重周

（瑞山會文書）

池内藏太、名ハ定勝變名細川左馬之助又細江德太郎

○文久二年五月十六日（瑞山ヨリ池庫太ヘ）

先夜も御來臨難有奉存候ゑかれば急々入用御座候ニ付上邊同志之格式親の名御しらべ被下御廻し被下度奉願候右迄早々頓首

五月十六日

池庫太兄

墨龍拜

（瑞山會文書）

○文久二年六月二日（間崎哲馬ヨリ瑞山及ヒ島村壽之助門田爲之助ヘ）

四月廿九日月次之飛脚未タ著セス餘リ遲緩故人々不審セリ

五月廿三日薩邸黑田嘉右衞門ヲ訪フ此仁記錄役トテ國史官ノ由一昨年ヨリ在府隨分質直ナル人物堀本田抔共懇意ノ由也此人モ兎角永井雅樂ヲ疑フ樣子金子與三郎武井勘平ヨリ姦狀ヲ承知ト申故近日金子ト面論相與ニ邪正ヲ糺シ長藩ヘモ質問ノ筈ニ約束ス尤モ此事ニ付其前兩度金子ヲ尋タ

堀次郎、本田彌右衞門

ル處始終他行ノ留守也

同日脇坂老侯楫水御呼出閣老被蒙久世侯モ未タ御免無之廿八日ニ拜辭ノ義被願出候處厚ク養生相加ヘ追テ快氣ノ上出仕可致尤モ外國掛御國益掛等ノ兼帶ノ役義ハ御免被仰付トノ由

只今承リ候處久世侯モ昨日又再願今日御免内藤侯ハ一昨日御免松平豐前守抔モ近々ボツタリト由説(申カ)愉快々々板倉脇坂水野三侯越前侯ヘ力ヲ添ヘ大御奮發之由御側衆之内大久保志摩守御免安對等之黨ト申事此節御側衆邊ヨリ親近之重臣ノ奸物及ヒ御奥之姦婦人一掃之密議ニテ越前侯三閣老等大苦心之由也

ボツタリ、落職ノ意カ

五月廿四日越前藩千本彌三郎ヲ訪フ中根靱負ヘハ未タ緣手ヲ得ス何分此度春岳公御重役蒙ラレ候事故藩士モ容易之儀吐露不致樣ノ内議ト見ヘ外交ヲ憚ル樣子也併シ彌三郎ハ桂小五郎懇意ノ人故半日計談論ス將軍家上洛等之議論長藩建白之通同意也中根等モ同斷之由春岳公之意モ不問シテ可知ト思フ

同廿日將軍家被仰出左之通

近年御政事向姑息ニ流レ諸事虛飾ヲ取繕候ヨリ士風日々輕薄ヲ增御當家御家風ヲ取失ヒ以テノ外之儀殊ニ外國御交際ノ上ハ別テ御兵備充實ニ無之テハ不相成就テハ時態ニ應シ御變革被取行候間簡易ノ御制度質直之士風ニ復古致シ御武威相輝候樣被遊游度思召候間一同厚相心得可勵忠勤候

同廿七日又々被仰出有之是ハ御書付未得一覽候得共諸事寛永前之御制度ニ御本ツキ被遊ト申事ノ由何分幕議ハ鎖國ノ御沙汰ナルヘシト云説多シ因ニ云フ薩ノ黑田ノ話ニ只今ノ勢一ト先鎖國ト主意ヲ立サレハ終ニ姑息ニ流ルヘシ其上ニテ長崎箱館邊ニテ兩三蕃制シ易キ不法ヲ働カサル者ノ互市ヲ許スヘシ長藩ノ建白ハ何分開港ノ方ヘ落著候樣ニテ太平人氣振起之處乏キ樣ナリ僕等不同意ト云此論長藩ノ開鎖ハ時之宜ニ從フ

ト云底意ヲ知ラサルニ似タリ然共薩藩議論剛正ヱ如ク見ルニ足リ甚頼
舗事ニ思フ於尊兄如何
都下市中にも御觸有之是迄苛嚴ノ法ハ盡ク被除候由半藏御門通モ明キ昨
夜モ右御門ヲ通候者ヱ話モアリ見附々々夜中往來不及燈火其外兩山御廟
參及御代參等ヱ時ハ臨時ヱ警衛等一切被差止之脇坂侯抔ハ僅ヱ人數ニテ
大通ヲ輕々舗往來萬人悅服難有々々ト云人氣ト云モノハ可笑物也夫ニ付
人心夷賊ヲ惡ム事益甚シ唐人嫌ヒノ御老中揃ヒシ故彼ヲイヽ氣味ニアハ
スヘシト鳶輩迄相語ル
新閣老孰モ不正ヱ音物ヲ取ラス裏通ヱ使者一切被斷何用何進物タリト
モ表玄關通トノ御沙汰アリ脇坂ノ役義御蒙リヱ御歎ヲ被戻候迚御留守
居方ニアキレテ居ル樣子也
同廿八日カ廿九日カ上洛ノ儀被仰出有之近年內是非御上洛被遊ニ付左樣
相心得兼テ用意可致置御日取ヱ義ハ追テ被仰出ト也長州侯ニモ廿九日御

東禪寺守衛ノ士藤松本藩士伊藤軍兵衛英國公使館員二人ヲ斬リ自殺ス

昨年ノ騷、文久元年五月廿八日水戸藩士有賀半彌等東禪寺ノ英國公館ヲ襲ヒシフ

暇被下候也昨朔日長州侯ニ加賀御嫡筑前守御兩侯ヘ將軍家御對顏有之上
意ヱ處不相分ト云フ
同廿八日酒井雅樂侯京師守護職御蒙ニテ當地出立井伊家御免追々黜罰ヱ
下タ地ト云說多シ爰ニ又タ一快事アリ聞タマヘ一昨廿九日ノ夜九ツ時頃
東禪寺ニ寓スル英夷步卒隊長「ソフレン」「コソツ」トカ云兩賊ヲ狙擊セシ者ア
リソフレン右ノ股ニ槍疵一ケ所右ノ腕口ヨリ切落有之絕命コソツ腹ニ二
箇所槍疵アリ深手ナレトモ未殊ヨシ一体昨年ノ騷ヨリ右寺內モ殊ノ外嚴
重三重ノ墻垣ニテ犬猫ノ通リテサヘ知レル樣ニ用心致シ有之由ヱ處一昨
夜ニ於テハ門戸ヱ鑰モ依然墻垣ノ間モ猫ノ通リ候跡モ無之ト申事夷人ノ
馬取ニ浪人雜リ居タリト云說多シ然ニ警衛人數奴僕ニ至迄遁去ル者無之
同心抔モ更ニ不審晴レサル也
ミニストル二十七日登城ヱ後如何成譯カ早速橫濱ヘ引取候也夫故此禍
ヲ脫セシト見ユ

周布政之助

僕モ廿五日ヨリ暑痢之風ニテ相煩ヒ今日漸起上候樣ノ事ニテ周布邊ヘモ得出掛不申明日明後日之内ニハ彼邸ヘ參ルヘシ西村鐵之助病中ニ毎々來リ世間之動靜ヲ知ラセクル長之櫻田邸留守居大和彌八郎手近故異事ハ時々手紙ヲ以報シクル直八モ下痢相煩往來スル事能ハサルヿ久矣大石君御

直八、時山直八

大石彌太郎

狀早速持參セリ木原ノ事モ呑込候樣子追々相談スヘシト也

宮田丹齋田内衛吉村田忠三郎ナリ

宮田村三友志氣依然彪三郎一昨日御詮議掛リヲ以類族同列之内ヘ御預ニ相成候處勘定方ニ游學生ナリ逆預カラス村田ト僕ヘ御留守居方ヨリ申來候得共僕ハ病氣忠三郎モ同列ハ勘定方ナリ我ハ同列ニ無之且一人ニテ番手不相調段申張リ居候内昨日品川邸憲府ヘ又被召出類族同列ヘ御預之立リヲ以揚屋入被仰付候

墨龍、瑞山賢弟、田内衛吉上田楠次カ

次優伏水ヨリモ御國許ヨリモ細々尊答奉煩候五月十四日發之御飛脚本月二日之夜著府墨龍君ヨリ賢弟ヘ御越之短簡傳覽御細書ノ參ラサル子細ヲ得且楠二次カヨリ浪華認之書到來四人共屈指楠之著府ヲ相樂居候長州侯今日御發駕中山道通御上リ也周布時山等ハ十日頃之發足也先相變ル事無之只建白之意一二徹通滿足ノ氣色也

敕使井島津泉州君今夕品川驛御止宿明朝御入府ト申事京師ニテ公卿方ヘ下リ候敕書疾ク京師ヨリ廻リ可申トハ存候得共爲念一通寫取差出申候南海之忠士義臣ノ歸嚮抔申御文意冥加ニ餘リ感涙ニ堪不申候僕因テ思フ本藩亡命諸人國ノ常刑ヲ加フ可ラス何トナレハ聖天子ノ叡慮ニ叶ヒ忠臣義臣ト被仰下候者ヲ藩國ニテ呵ルヘケンヤ大過アルナレハ格別小過ハ赦シ無罪トスヘキ事論ナシ若右等罪案ノ論ニモ至候ハヽ御賢慮ノ程奉仰候

幕府被仰出左之通

一六月朔日月次御禮以前布衣以上之役人一役一人宛於芙蓉間御老中列座被仰渡候趣

近年之内御上洛可被游旨被思召候御治定之義ハ追テ可被仰出候此段先御内意可申達旨被仰出之

一御禮後万石以上之面々再於御黒書院御目見被仰付上意之趣近年不容易時勢ニ付今度政事向格別ニ令變革候間孰モ爲國家厚相心得心附候義ハ可申聞猶年寄共可申談

石谷因幡守

御側御用人水野出羽守殿モ落職其外御町奉行石谷御免勘定奉行邊モ奸物被差退候由未夫々名前得承リ不申春岳公之御力居多ト申事ニ候今朝水藩內田清次郎ト申男突然ト尋參リ咄承リ候處中納言公ニモ此節一橋越前兩公ト繁々御面談之由也

同志中此地ヘ罷越候義眼前危急之時勢ヲ政府ニ頓著無之ヨリ銘々微忠之至誠ヨリ出テ三都遊カ寓私財ヲ費シ公用ヲ辨シ候處此節ニ至リ政府ニモ憂慮有之譯ニ候得者新御隱居樣護衞之人數等ハ片時モ早ク御手配ニ相成就テハ是迄三都之間ニ罷在微忠ヲ盡候者ハ右護衞之人數之內ニ編ミ入レ志願ヲ達セサセ候義當然之義ト奉存候勿論君家之爲メ費用等厭ヒ申譯ハ無之候得共同志ノ內多ハ微祿貧生之事ニテ金錢ノ事計ハ力ニ能ハサル者ニ

新御隱居、山內豐信容堂

候得者是等ハ上タル人ノ勘考アルヘキ事歟ト奉存候既ニ三友共近來之勢穩故一ト先歸國致スヘク左ナクテハ何ッ迄モ財力續キ申間舗トノ事僕ヘ被談候是亦尤之事ニ候乍併未タ鮫州邸ヘ御人數モ參リ不申最早內亂ハ有之間舗ナレトモ攘夷ノ議起居候事故夷賊之寇亂難計今暫相見合候筈ニ評議仕候僕ハ探索之任故乍不及何ッ迄モ滯在之心得ニ御座候得共三友之內ハ事宜ニヨリ歸國之程モ難計甚以殘念之至ニ御坐候此義ハ社中ヨリ申立候ト鄙劣ニモ相聞ヘ候樣之嫌疑モ可有之候得共國家之爲メ御賢慮被成要職之諸先生ヘ御謀被成候テハ如何將又上邸鮫洲之御用役何分明斷ニ乏シク動モスレハ俗吏ニ被欺吾黨諸願等多ク沮ミ止メ一同鬱悶不平勝ニ候中々ケ樣ノ時節ニ忠義之論ヲ折シク樣ニテハ勤王モ何モ出來不申是等モ御考モ可有ト奉存候故入御耳置候

容堂樣今以上邸御滯坐也

圓齋君還俗之上純二郎ト革名致度段願出候處當地御目附方計ニテ相濟ス

竹五郎君ヨリ於御國許願出候上ト申事餘程議論モ致候得共埒明不申其上
同人實ハ元服致居候テ上御屋舗往來モ難出來大迷惑ニ候竹五郎君ハ住吉
之戍營ニ被詰候欲ト存候大寶君急ニ御引合右之通願出ニ相成候樣御周旋
被下度圓君ヨリ被托候

六月二日夜燈下書　　楓川

墨龍君　　墨龍、瑞山
稚戎君　　稚戎、島村壽之助
伏水ニテ
大寶君　　大寶、門田爲之助

同志之諸君ヘ御序ニ宜シク三友ヨリモ同シ

（瑞山會文書）

○文久二年六月十一日　（中山忠能ヨリ三條實美ヘ）

原書
卷表
三條
實美
自筆

從忠能卿内東匁卒不克寫得送土州之間
借乞彼卿草案書寫之畢　六十三　實美
文久二六十一於御前書試草案即日御内定
實美朝臣ヘ遣ス同日同朝臣參内示談下官正三
○島津ゟ容堂ノ事被示六十二本多彌右衛門ヘ示

追て本文之趣至極御内々之義に候間必々他漏無之樣御取計御含可給
候　乱書
弥御安全珍重存候抑〻御尋申入候土州當主今歳出府年に候処因所勞延引
被願候欲の說有之候右も實事ニ候哉内實ハ伏見通行も有之候ハヾ京都へ
立寄ことも有之候樣被遊度御内々
叡慮ニ被爲在候尤兵などを被召動候与申樣の儀ニハ一切不被爲在候へと
も方今世上の形勢何共深被惱
宸襟候就ゐて薩長両藩厚周旋之次第粗御承知の通ニ候於土州も御内々御

依賴被遊度御事も被爲在候に付通行の便　思召之邊も被仰出候へハ至極穩ニゐ宜与被　思召候處先文所勞延引之由被　聞食深以御殘念被　思召候凡いつ比出府通行相成候哉御内〻被　聞食度との御沙汰に候仍此段密〻貴卿迄御尋申入候御内調之上否御答可給候也

六月十一日　忠能

三條羽林公

（公爵三條家文書）

○文久二年六月二十日（山内豐範ヨリ三條實美へ）

貴翰被成下恭拜誦仕候甚暑之節御座候處先以被爲揃愈御勇健被成御座恭賀之至奉存候然者方今京師之形勢御内密被仰越候事共實に不容易時勢と奉存候右に付中山大納言殿より極内々を以當時勢旁參府仕候節京師ニ滯在薩長同樣皇都警衛之義弱年不肖之私へ御依賴被仰付度　叡慮之御旨御内沙汰之委曲貴君樣へ迄御示之趣拜承仕候ては身に餘り難有奉畏候然に方今之形勢弊藩に傍觀難相成短才黃吻を不顧乍不及公武御合體之筋兼て關東へ建白仕度深慮之筋御座候に付早々彼地へ罷下心得に御座候處今春以來不勝にて其儀延引仕漸此節快和に相移り候間此度發途仕一先關東へ罷下り前文之意味父容堂へも斟酌仕候上にて取計申度存念有之候故滯京之儀は今暫御宥恕之御沙汰を奉蒙度依て御都合に寄爲名代召連候人數差分相應手配方仕　皇都爲守衛差置申度奉存候間此段預め得貴意候に付右之旨趣大納言殿へ御都合宜敷被仰入度猶委細之儀は近々上京御直談可仕夫迄之内任來諭家來之者一人貴殿へ迄伺候爲仕前以彼是御引合爲仕可申間其節委曲私内情御聞取を以不惡樣御取扱被仰付度伏て奉願候右彼是不外御親戚之御續合に候得者猶此上返々も宜敷御取持被仰付相成丈忌諱に不觸樣之處偏に御配慮被仰付度奉希候右御報旁愚札候恐惶謹言

六月廿日　　土佐侍從

三條少將殿　參貴殿

（公爵三條家文書）

○文久二年七月二日（三條實美ヨリ中山忠能へ）

暑熱酷烈難堪候倍御清佳雀躍之至候抑唯今土州返翰來着致候間則入電覽候今明日之中にも中老先着仕候と存候猶其上承可言上候不取敢返書入御覽候尤持參可申上心得之處時邪感冒平臥之仕合乍欠カ失カ脱敬先々以僕差上候猶一兩日之內拜面可申伺義も有之候間宜希上候仍不取敢早々要用如此候也

七月二日　　實美

中山亞相公

密展

（侯爵中山家文書）

忠能朱書〔七三來卽日入　叡覽〕

○文久二年七月十九日（岡村甚三郎ヨリ瑞山へ）

一筆啓上仕候殘暑强候處被成御揃愈御安全可被成御渡愛度奉存候隨而私儀無事ニ消光仕候間乍憚御休意可被仰付候時々何角御世話相蒙り千万々々難有仕合ニ奉存候又々此度も品物留守へ差廻し候間宜樣奉賴上候先取紛右御賴御挨拶迄申上度如此御座候尙期重便時候恐惶謹言

七月十九日　　半平太

甚三郎樣

尙殘暑御いとひ專一ニ奉存候以上

（伊藤修藏文書）

○文久二年七月二十六日（瑞山ヨリ妻富子へ）

との樣御病氣ニてまゝ〳〵御滯坂日々用事有之どゝへも參ふゝ格別はなし

との樣、山內豐範

もなし

そしゝ、痲疹

との様もきのふ御ゝみ御とき被遊來月の初ニゟ　御發駕の御趣なりもし
ゝ大流行なれとも去る人よゝ死よそふな人ハなし安心々々惣分へ御ふさ
たよろしくゝしゝ

七月廿六日　半平太

おとゝとの

（武市家文書）

無事

奈美子、瑞山ノ姉山崎孫平ノ妻

ねぶと、腫物ノコト

○文久二年八月朔（瑞山ヨリ姉奈美子へ）

此間ハ御文被遣難有そんしゝ殘暑強候へとも御きゝんよく小供のそく才よて先て度そんしゝ扨御引越被遣候よし留守向何角御世話被遣難有そんしゝ私事ハそく才よて夜ひる世話敷くらし候乃ゝ少も々々御氣遣被遣間敷願ゝ足のそねへねぶとらでゝつまみ候處とゞめていしぶ、イノゴ

竹馬、瑞山ノ甥慎三ノ幼名

仲吉慎三ノ弟

しぶニなりきのふハ往來も來出ゝひるいしやと云ものゞ有て夫ニかゝり
ひるをつけ大ニつへくゝはゝろき申候竹馬も文武をもけむろふ仲吉もよふ云
事を聞ゝふまあ〳〵めてとふこさりまゝゝらしゝ

八朔當賀

半平太

姉上さゝへ

衛吉、田内衛吉茂稔瑞山弟

衛吉もけさ戻りました當時畳置つもりておさりまゝ
暑御いとゝひ御保養專一トそんしゝ

（武市家文書）

○文久二年八月朔（瑞山ヨリ妻富子へ）

ほとニよるとゝの様よりさき壹人京都へ被差立ゝも去れん
ゝと月十二日の文相達候殘暑強候へとも皆さゝ御きゝんよく先て度そん
し候

丑五郎、瑞山ノ僕

太守様此頃ハ御全快被遊恐悦相唱次ニ我等丑五郎無事氣遣有ましく候扨

もしら大流行よて保馬以藏六衞田那部高松阿部多田其外御供え人九歩通り相煩(ワツライ)候處此頃ハ皆々仕まひ大よ々々安心々々丑五郎も同樣よて候處是又全快よてくつろき候御國もてやる事トそんし候

小笠原保馬、岡田以藏、阿部多司馬、楠瀨六衞

一衞吉今朝江戸より歸り來り村田忠三郎ト兩人來ル兼齋ハ直ニ御陣屋(ヂン)の方へ行候よし兼齋ハ竹五郎の石とふ抔たてゝをき夫より歸るよし衞吉ハ當分大坂ニ留メ置つもりなり此頃ハ天下の大事の場合(ヘアイ)よて只うらうらした事よてい不相成事なり

兼齋、前ニ圓齋トアリ

一田邨べの兄さん金子三兩もつてき(た脫カ)・のへ持ておんらへ云ておおさんせ

一今月の十日ゟ十四五日よゟ御發駕よて京都へ御出なり夫より又京都よて御滯座なり

先格段の咄もなしらしル

八朔の夜

おとみとの

半平太

不相替世話敷事内ニおるも同し事よて朝ゟ晩まて人よたてゝ[illegible]れ候あつれそ〳〵

（武市家文書）

○文久二年八月十八日（瑞山ヨリ姉奈美子ヘ）

此頃ゟさん〳〵雨ふり暑も次第ニうもふき少しゟ暮しよく相成候先々御前さは初外皆々御きゝんよく然て度存〳〵私事大坂へ著て以來日々世話敷心配致しゐるゝ處ハ少しもなくよお〳〵一兩日前より少しもきニ相成きのふハ無據人よさそゐれらの日本一の太夫長門ト云を聞よゆき朝顏日記宿屋の段を聞ましたゝふい人ら來て終日もおしましたあもいまゝ御陣屋へゐゝ行ませんきよ朝ゟふゆくつもりておざりまも少も々々御氣遣被遣間敷くれ〳〵存上〳〵扨衞吉も廿日廿一日頃ゟ出足よて歸る筈ておさりまゝ嘸々おもさゟ方御待ゟねと存まゝ

ゐゝヨウノ意

田内、衞吉茂稔瑞山ノ弟

太守樣も來る廿三日御發駕よて京都の方へ御いでニなりまゝ京都よてゟ

又長々御滯座でおさりまゝ先格別の御咄もおさりません暑御いとひくれ〳〵存らしれ

八月十八日の夜　半平太

姉上さゝへ

（武市家文書）

○文久二年八月二十六日（瑞山ヨリ小南五郎右衛門へ）

奉願口上覺

私儀病氣ニ御座候ゑ今日御供相調不申於當所養生相加へ快氣次第妙心寺之方へ罷越申度奉存候間宜御聞屆被成下度奉願候以上

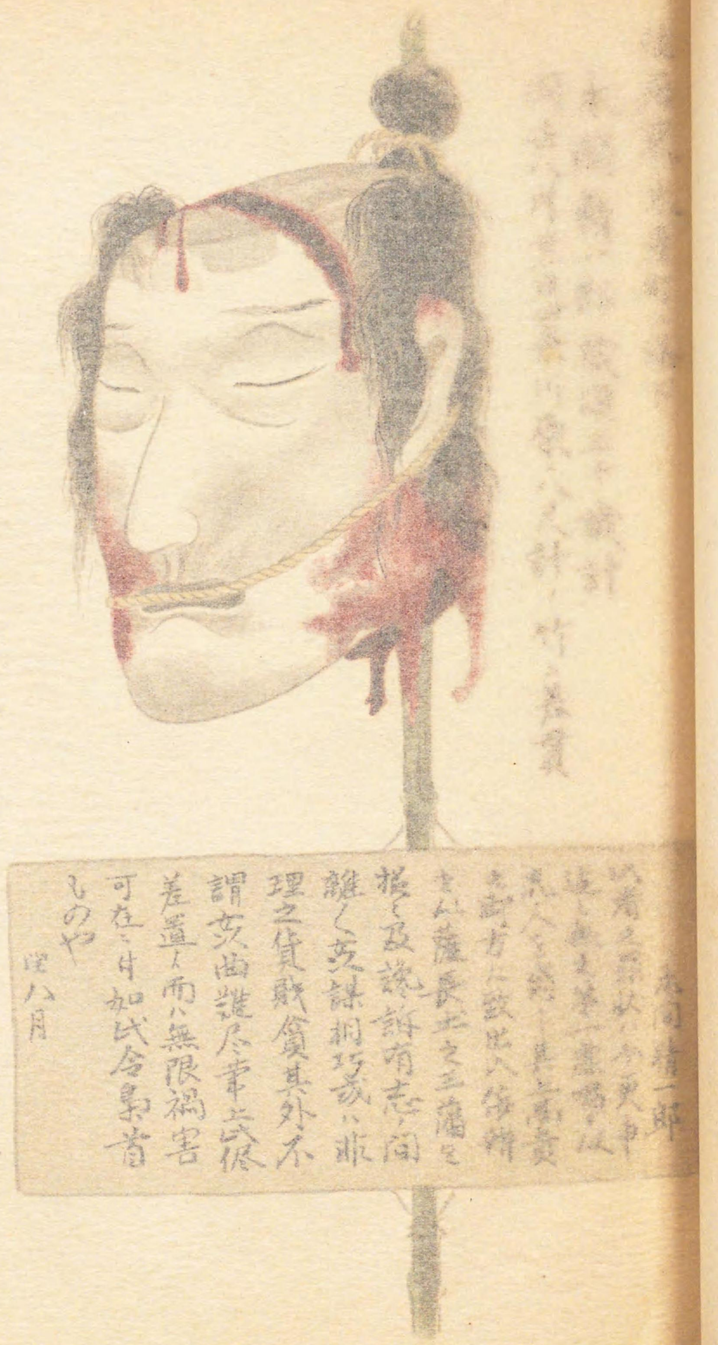
右之趣急々御執成被下度奉願候以上

八月二十六日　武市半平太 五

小南五郎右衛門殿

（川田豐太郎藏）

227946



說白精一郎ハ越前之浪人劍法儒學達人成由遊里ゟ夜更帰宅之砌道南切合討ル、胴ハ四條高瀬ニ有之候處同夜大雨ニ而高辻迄流其所ニ而杭ニクヽリ附有之着衣黒縮緬羽織小倉馬乘袴（実説）

（元治元年六月以降瑞山党獄獄ゟ各條参照　筆者中郊東摹寫）

八月

又長々御滯座でおさりまゝ先格別の御咄もおさりません暑御いとひくれ
〳〵存られしれ

半平太

八月十八日の夜

（武市家文書）

姉上さまへ

○文久二年八月二十六日（瑞山ヨリ小南五郎右衛門へ）

奉願口上覺

私儀病氣ニ御座候ゑ今日御供相調不申於當所養生相加へ快氣次第妙心寺之方へ罷越申度奉存候間宜御聞屆被成下度奉願候

右之趣急々御執成被下度奉願候以上

八月二十六日

小南五郎右衛門殿

武市半平太 五

（川田豐太郎藏）

227946

住居東木屋町二條下

本間精一郎歳頃三十歳計

同壬八月廿日四条川原ニハ尺計ノ竹ニ差貫

本間精一郎氏者之罪狀ハ今更申迄も無之第一虛唱ヲ以流人を惑し其上高貴之御方に致出入佞辯をゝ薩長土之三藩を始て及論訴有志ノ間離く交謀相巧或ハ非理之貨賊貪其外不謂姦曲誰尽筆上氏很差置ノ而ハ無限禍害可在ニ付如氏令梟首ものや

壬八月

說曰精一郎ハ越前之浪人劔法儒學達人成由遊里々夜更帰宅之砌道而切合討ル胴ハ四條高瀨ニ有之候處同夜大雨ニ而高辻逆流其所ニ而杭ニクヽリ附有之着衣黒縮緬羽織小倉馬乘袴（寒暖姙）

（元治元年六月以降瑞山覺鞠獄ノ各條參照　筆者中郊東摹寫賣）

○文久二年閏八月四日　（山内豐範へ　内勅）

蠻夷渡來後　皇國の人心不和を生じ候處既に去夏以來帝都にも彼是不穩の義暴說有之薩州取鎭後先靜謐に候得共萬一京都騷擾の事有之候ては追々國亂の程難計彼の夷賊胸算に可陷の條深被惱　宸襟候於松平土佐守は自關東兼て大坂御警衛も被申付有之候幸此度通行の由被聞召候間非常臨時別義を以て暫滯京有之御警衛御依賴被安　叡慮度　御内沙汰候事

（侯爵山内家文書）

○文久二年閏八月六日　（瑞山ヨリ妻富子へ）

冷氣ニ移り暮しよく候處皆樣御きゝんよく先て度存候我等事ゐと月廿四日伏見へ御著ゑ晩より少々不心地候處翌廿五日おして御供致し京都著其夜よりねつ有之少々の風と心得ぞふもゐなとおしふへむし餘程ゐせも出翌廿六日ゐ

ぞふもゐ、雜炊

大守様、豊範

太守様大通院へ御引移被遊候處何分不心地ゆへ御供もできぬ宮地と云醫者にゝり見せ候處風ゑてさしたる事ゑなしと云ゑきりにむしあせゑ澤山ゑ出れとも食もゝまゝ次第にねつも強くなり不心地言べゑふゝ九日頃ゑ至り一向飯もゝまゝ大ニゐるく候故考へ見候處此大都へ出おりなゑふやぶ醫者ニかゝりておるゑ安房らしき事とおもひ夫ゑ京都一番の醫者新宮良民と云醫者ニかゝり見せ候處是ゑ甚危しきん志よふのふ、熱衝腦ゑよふのふと云て今の内なれゝりよふぢあり候ニ付御仕合なりと云夫よりひるを百貳三十ひたれへつけ四日計ひるの付ケとふし藥ゑ下しゑて志きりニ下し候處がゑ〳〵とよく相成大ニ仕合のよき事なり今日ゑ髪さゑやき入湯なと致し足なふしニ出て行候寂早爾來之通相成候ニ付氣遣有まし〻く存候扨我等事ゝ他國の人へ引合ウ事を申付ふれ候ゆへ大通院の方へゑ參ふゝとゞまりおり候難有キ事之其替り著物ゝ入りもや著てきた夏ぢおりゑなゐの様ニなり壹つゑしふへ候處これも寂早ふるび又壹つゑしふへ申候ろの肩衣地

小南五郎右衛門　小原與一郎　五十嵐文吉　丁野左右助　後藤影谷守部、後干城　小笠原保馬、瑞山ノ甥楠瀬六衛

袴なとゑしふへ申候是ゑおおりの様なれとも全く左様ゑてゑなし御公卿様へ出る事もあるニ付此ゑゑの修行者の風とゑ大違ひなり洛中ニのゑる人ゑ御目附の小南と小目附の小原と徒目附の五十嵐と丁野と谷守部と我等と六人なり此組へ入ふれ本望なり大通院の方ゑ山れふちゑて在郷なり是ゑ頗安氣なり安馬衛吉六衛抔とも度々來ル惣分皆々息才なり太守様御きゝんよろしく彼是の御都合もよく恐悦至極なり丑五郎もそく才又御かし人の直次と云ものゑごくどふされゑてとりへ赤岡の丑之丞と云もの下使ゑ來り候處是ハ頗るよきものゑて安心なり其上是ゝ仕立屋のよしゑて著物ゝ拔ぬゐもるに都合よくおびをゝん候處直ニ丑之丞ゲぬひ至極てふほうなり扨夜ゲ長くなり此間中ゝひるもねるゆへ夜ゲぬふれゑ夜るゑゑゑおまり入ゝふゝ久しぶりニ足なふし致しだれ候ゆへ今夜ゑ快寐ろふと存候前の親父様の御病症と同し事ゑてのふへ病ゲ入り甚危く候處幸ニ早くよき醫者ニかゝり全快致し候明日よりゝ諸方へ又もしくり廻る

前ノ親父様、富子ノ父嶋村源次郎

心得なり先ゝ〳〵らしゐ

半平太

閏月六日夜認

おとみとの

ねへさんへよろしゐ申傳其外何ゝさへも同樣御申有へく候らしゐ

（武市家文書）

○文久二年閏八月十四日（土佐藩應接方）

一土州

君公當月日、參内始終長州ノ如シ御家老山内下総御椽迄伺公之由

在京家老　山内下総

應接方　小南五郎右衛門

武市半平太

平井收次郎（見聞集）

土佐藩ノ記錄ニヨレバ此時ノ應接ノ役人トナルコトハ外モ小谷原與一郎ノ七人ノ丁野守左右衛門ノ五人ノ十野嵐文吉助ノ又十藩主ノ月五ノ日參内ハナリ

○文久二年閏八月十五日（間崎哲馬ヨリ五十嵐文吉ヘ）

將軍家御上洛も明亥五月と御内決之由海軍練習之御趣意にて江戸海より軍艦に被爲召攝海迄御越之趣列藩陪從之儀は如何相成るも難測候得共本藩に於ては急に蒸氣船之類御詮議之上御買入有之度長州には今正月高杉晋作と申す人上海へ赴き和蘭へ注文に相成、明年正月迄に乘廻る筈長さ貳拾五間許價は七萬ドルと申候尚近日晋作に直話之上可申上阿州も横濱にて相調かけ候樣子に候運用之人尤急ぎ候急々御撰之上海運署邊へ御賴み に相成度長州は海軍署に四五人箱館洋學館に同く長崎に同じ位出し居候 阿州藝州抔も皆十人許海軍署に賴込みに相成候

議論多く成功少きは今日天下之通患に候先此一事斷然と御詮議決奉仰候 其他は次之御飛脚に可申上候

後八月十五日黄昏

間崎哲馬

五十嵐文吉樣

普通之文言は御免を蒙り申候先頃五郎右衞門殿へ罷出候時事見聞の所は密々老兄迄申上候様被命候先格別之事も無御座右本藩急務のみ申上候都下事情此度は委細得不申尤門田爲之助武市半平太等へは荒模様申遣し候間是等より御耳に入り候筈に御座候○別封乍憚五郎右衞門殿へ御直に御差出奉願候

（瑞山會文書）

○文久二年閏八月二十三日（瑞山ヨリ妻富子へ）

ゐと月廿九日の文又ゝき添の文とも此間相達し先々ほとなく寒く相成候處姉上さゝ御きゝんよく外皆々ふじ小供も皆々むしゝも仕舞候よし前よも皆々相濟可申先て度そんし候我等ふじ日夜せゝしく相暮し候間御氣遣有間敷存候衞吉ももゝや歸國と存候扨宮崎兼齋も誠よ氣のとく千万死るとゝ思ひゐけもゐき事宮崎のおもさん方いゐ計と存候此度ハ大取紛ゆへ田内へも見廻狀もゐゝやらんくれ〳〵（脱カ）よろし御傳へ有へく候

前、嶋村家

ゐゝハヨウノ意

駄荷カ

一たゝい江戸へいやゝゝを持ており今度少しもこまる事なし

一京都よて殿様の御滯留の事まゝゝ云れ不申中々當時江戸へ御出の事ハ有間敷と存候されとも江戸の御都合次第なり

一我等ゝ先日より公卿方へ出何ゐく申上御咄いさし候御くけさゝハおもぐゝを付白のき物ニ紫のもゐまなときており候誠よけつこふよ物を言ものなり

勝賀瀨小八郎

一勝賀瀨小笠原抔其外の間柄へまゝ狀をへゐやゝん誠よ夜るひるのゝきりなくをゝしくゆへ誠よ御ふさゝなりよろしく御傳へ有へく候

瑞山ノ嫁ノ姨登美子ノ所

一きものをおゝせい京都御屋敷内小畑孫次郎をゐてゝおゝしてよし

小笠原嘉助瑞山ノ姉美多子ノ配

一おくけさゝへとも出るニ著物ゞ入ゝまるなりゝの肩衣なとゐけて行所ゝ我身なゐゝおゐしき事ゝ

前のおちさん島村壽之助

一前のおぢさんへまて忠義の人の書付をさし出し候ニ付御聞有へく候扱もなしもゐれともゝやねんとたまゝん　らしゝ

閏月廿三日夜　半平太

おとゝとの

ねへさんへもよろしく

（武市家文書）

○文久二年閏八月廿八日（村山齊助ヨリ瑞山ヘ）

先日ゟ御扨駕被下候處草々之仕合に而御失敬仕候然は少々御示談申度儀有之今朝參上と存立候得共俗務繁多にゐ不能其儀就ゐは近頃恐入候得ともゝ八ッ後ゟ晩景迄之所御隙操被成下御來臨被下間敷哉右御願度草々

閏八月廿八日　村山齊助

武市半平太様

机脱カ

玉下要用

（田岡正枝藏）

口上

今日ゟ晝後ゟ御入來被下候樣申上置候處指限り候御用向出來唯今ゟ外出仕候甚以失敬之至御座候得共何卒御海涵被成下度いつれ明後日野生御寓居へ參入可仕候右御斷之爲如此御座候已上

閏八月廿八日　村山齊助

武市半平太様

内用

（上田開馬藏）

○文久二年閏八月上旬稿

○瑞山立案藩主建言書（其一）

（藩主ノ名ヲ以テ起草セルモノ前後數通アリ最後ノ一通ヲ以テ成案ト認ムベキモノトナス本書即チ是ナリ）

此度

敕諚を以京師御警衛之仰を蒙り若年不肖之身分ニ御坐候得共天下安危之所係深被爲惱カ宸カ震襟不容易時勢ニ至り候上ハ粉骨碎身一國之力を盡し敬

ゐ遵奉仕候抑外夷跋扈手ニ餘り候源ゐ昇平久敷相續き自然君臣之大義忘却因循偸安仕候とり忠憤義烈之士沸騰仕事ニ御坐候君臣名分相正候儀も兼ゐ薩長二藩周旋仕候處ニ御坐候兎角方今歸著仕候處も攘夷之一儀与奉存候其策ニ至りてハ容易ニ難被行詮もる處ゐ根元を整不申ゐも不相成事ニ御座候卽根本を相固メ候愚策左ニ申上候今諸侯を見渡申處各相應ニ臣子蓄育仕自ラ緩急之用ニ相立申様ニ御坐候得共　皇國第一之於京師ゐ却ゐ防禦之用ニ相立候者無御坐候素り諸藩ゐ警衞仕候事當然之義ニゐ兼ゐ其御手當ニ相成居候へ共外寇不可測之時ニ至りゐも諸侯各其國を捨遠く京師を警衞仕候事決ゐ難出來事ニ御坐候左有ル時ハ根本甚危候間五畿一圓御領ニ奉附　親王以下諸縉紳へ御分與被遊萬一不虞之戒有之候共畿内一箇之力ニゐ充分ニ御防禦ニ相成候様被遊度尤河泉二國を以近江一國ト御取替ニ相成候様被遊度奉存候攝山和江之四國を以御領ニ奉附之義も則根本ヲ固メ内を整之大眼目と奉存候右四國之内ニゐ爾來封食仕候諸侯ハ幕府とり自領ヲ以裂(割カ)與へ不殘其地ニ爲移　叡慮之儘親王方ヲ置キ諸國忠勇ノ浪士悉御召抱被遊扨又大坂邊豪富之者へ申付器械戎具充分御手當被遊豫防禦之御手配相立其上ニゐ斷然と攘夷之　勅ヲ御下被遊候様仕度右四ヶ國御領ニ奉附之儀被爲行候時ゐ萬民乍恐天意ヲ奉恐察不示して實意へ基(ニカ)キ必死之覺悟相極メ申候右様相成候時ゐ彼ノ醜夷共譬へ神州を取卷來ルとも不足憂事与奉存候右方今之御急務無此上御事与奉存候然ニ能々關東之事情を相考候ニ先達ゐ被　仰下候勅旨さへ未遵奉不仕苟且仕候体ニ御坐候得も今又一二之諸侯ニ被　仰含右件口述を以周旋仕候とも必然遵奉仕間敷奉存候雖然今此義不行時ゐ攘夷之謀も難相立事柄ニ御坐候へハ一時之權議(マヽ)を以兼ゐ　勅書奉内願候肥後幷備因二州阿波を初メ九州諸藩へ上洛警衞仕候様　倫(綸)旨御差下ニ相成大藩七八　闕下ニ參候仕赫々之武威を御觀シ被遊其後ニ　勅使を以關東ニ被　仰遣仁恕正義之命を以幕吏之心膽を挫き堂々之權威を以虛喝因循

之意底を碎き候時ハ寛猛之御處置ニ恐怖仕り　敕旨遵奉仕可申候何分只今之患人心之因循而已ニ御坐候今方ニ神州英武之氣を挽回し王室を恢復スルヱ大機會ニ御坐候へハ早々　御英斷被遊候樣奉仰候臣土佐守邊疆微弱之國柄ニ御坐候得共唯天意之儘ニ進退可仕微忠之愚慮萬一ニも御採用被　仰付候ハヽ難有奉存候以上

壬戌閏八月

後ノ數通亦前同樣之者ナリ少シク意味ノ增加アルヲ以テ別ニ寫置ク是ヲ以テ見レハ山內豐範戊秋之獻白ハ卽チ瑞山ノ立案ナリ當初三藩ノ名ヲ得ルモ蓋シ此ニ原ス此外同立案數多アリ今略ス

（瑞山會文書）

○文久二年閏八月上旬稿

○瑞山立案藩主建言書（其二）（大底前同文意）

此度

敕諚ヲ以京師御警衞之　仰ヲ蒙り若年不肖之身分ニ御座候得共天下安危之所係深被爲惱（宸カ）腦震襟不容易時勢ニ至り候上ハ粉骨碎身一國之力を盡し敬ゐ遵奉仕候抑外夷跋扈手ニ餘り候源も昇平久敷打續キ自然君臣之大義忘却し幕吏因循偸安仕候ヨリ忠憤義烈之士騰沸仕事ニ御座候君臣名分相正候義も兼テ薩長二藩周旋仕候處ニ御座候兎角方今歸著仕候處ハ攘夷之一義ト奉存候其策ニ至りてハ容易ニ難被行詮スル處ハ根元を整不申ゐハ不相成事ニ御座候卽根元を固候愚策左ニ申上候

今諸侯を見渡候ニ各相互ニ臣子儲蓄仕自ラ緩急之用ニ相立候樣ニ候得共

皇國第一之京師ニおひてハ却ゐ防禦之御用ニ相立候者無御座候固ヨリ諸藩ゟ警衞仕候事當然之義ニゐ兼ゐ其御手當ニ相成居候得共外寇不可測之時ニ至りゐハ諸侯各其國ヲ捨遠ク京師を警衞仕候事決ゐ難出來事ニ御座候左候時ハ根本甚危候間五畿一圓御領ニ奉附　親王以下諸縉紳ゟ御分與被遊萬一不虞之戒有之共畿內一箇之力ニゐ充分御防禦ニ相成候樣被遊

度奉存候尤河泉二國を以近江一國と御取替ニ相成攝山和江四國之內爾來封食仕候諸侯ハ幕府ヨリ自領を以裂(割カ)キ與へ申度扨又幕府從來之規則諸侯之妻孥江府ニ閣キ毎歲參府仕候ニ付財用缺乏之國柄而已ニ御座候是全德川氏諸侯ヲ弱クスルヱ權道ニ可有之候得共如今外夷隙を窺之時ニ當り皇國一圓之正氣ヲ不挫(マヽ)ハ不可爲之義ニ付諸侯參勤之ヱ規則ハ國之遠近路程之難易を測り五年或ハ三年モ一度ツヽ參府仕候樣相成妻孥ハ各其國ニ就カしめ申度奉存候右方今之御急務無此上御事ト奉存候然ルニ徒ニ關東之事情を相考候ニ先達而被　仰下候　敕旨さへ未タ遵奉不仕苟且仕候体ニ御座候へハ今又一二之諸侯ニ被　仰含右件口述を以周旋仕候共必然遵奉仕間敷奉存候雖然今此義不行時ハ攘夷之謀も難相立事柄ニ御坐候へも一時之權議(マヽ)を以兼而　敕書奉內願候肥後幷因備二州阿波ヲ初メ九州諸藩ニ上洛警衞仕候樣　倫(綸カ)旨御指下ニ相成大藩七八　闕下ニ參候仕候樣相成赫々之武威を御覩シ被遊其後ニ　敕使を以關東ニ被　仰遣仁恕正義之命を以幕吏之心膽ヲ挫き堂々之權威ヲ以虛喝因循之意底を碎き候時も寬猛之御處置ニ恐怖仕　敕旨遵奉仕り可申候何分只今之患ヒ人心之因循而已ニ御座候今方ニ　神州英武之氣ヲ挽回し　王室ヲ恢復もる大機會ニ御坐候得ハ早々御英斷被遊候樣奉仰候臣土佐守邊疆微弱之國柄ニ御座候得共唯　天意之儘ニ進退可仕微衷之愚慮萬一ニも御採用被仰付候ハヽ難有奉存候以上

壬戌閏八月

（瑞山會文書）

○文久二年閏八月上旬稿

○瑞山立案藩主建言書（其三）（大底前同文書）

此度

敕諚を以暫滯京仕御警衞の蒙　仰若年不肖之身分としあ恐入候次第ニも御坐候得共不容易時勢ゟ至り斯被爲懸　叡慮上ハ難有御請仕粉骨碎身一

國之力を盡し深遵奉可仕与苦心配慮仕候

抑外夷跋扈シ手ニ餘り候源も昇平久敷打續き因循偸安仕候ゟ自然君臣之大義を忘れ幕吏各恐怖を抱き因循姑息之所置有之ゟ赫々ゐる　神州國体を汚穢し往古未曾有之大恥辱を招卒ニも智者ありといへとも不能善其後之大害を釀候段言語同斷不安次第ニ御坐候故ニ爰以忠憤義烈之輩も慷慨切齒ニ不堪憤怒之餘り度々暴發も有之候得共幕吏總ゐ暴政之令然處を不覺悟却ゐ忠直正誼之士を懲治し慘刻を極メ益醜夷無饜之求ニ應し　皇國之疲弊萬民之愁苦を不顧偸安を旨とし聊憂國之心無之ゟ諸藩有志之士彌憤懣を抱き天下之變不可測深被爲惱震カ襟候處薩長貳藩ニおゐてハ天意ヲ奉承体仕り盡力周旋種々建議も有之兎角歸著仕候處ハ攘夷之一策ニ可有之其攘夷ノ策ニ至り候ゐも尤一大難事ニゐ容易ニ難被行詮スル處ハ所詮根本を整不申ゐも不相成事ニ御坐候ニ付其根本を固候愚策左ニ申上候

一畿内ハ根元　天子之御給奉ニ相定り候所柄ニ御坐候得も今其本ニ挽回し五畿一圓御領ニ奉附　親王已下諸縉紳之御分與被遊胎士ニ御分與被遊向後も畿内一箇之力ニゐも醜夷之不虞を充分御防被成候事相成候樣奉存候尤河泉二國を以近江一國ニ御取替相成候時も御便利之筋与奉存候

一列侯於關東平生蓄育仕候妻孥も各自其國ニ就し免其身亦參勤相止候時ハ粉黛之給且奔命之費も無之自然富國ニ相成可申不而已於江戸も輻輳之口啄を減し無益之粮穀を費不申候

一政令も朝廷ゟ御施行被成候處ゟしゐ往古ゟ天子躬自訴訟を聽斷被遊候處鎌倉氏草創ゟ而以還壹是ニ權門ニ御委託被遊是以漸々君臣之分不分明自然習俗之久ゟ至今てハ幕府を尊奉之餘り畏も　天子を凌慢仕樣ニ相成誠ニ以奉長歎息事ニ御坐候此度屹度名分御正被遊政令一切朝廷ゟ御施行ニ相成諸侯亦直ニ朝廷ニ參勤仕候樣被爲成度奉存候尤方今外夷艱難之時節ニ候へハ朝勤之期を御宥緩有之各國儲蓄强兵之義相勵ミ神州之藩屏ニ相成候樣奉存候

右三條も方今之御急務ト奉存候間早々叡斷被遊御施行ニ相成候樣奉存候乍併一二之諸侯ニ被　仰含關東罷下於彼地ゟ仮令毎人ニ說諭之周旋仕候共斯迄苟且偸安仕り候人情ニ御坐候得も決ゟ遵奉仕候義も有間敷却ゟ幕吏之侮謾ヲ受可申候畢竟幕吏之遵奉不仕(マヽ)敎シハ先達被仰下候　敕旨御請乍申其實今以不被行且又此度一橋越前連署差出候紙面上ニ時勢難被行なと申處ゟて分明ニ御坐候此上ハ兼ゟ　敕諚奉內望候肥後備前阿波を初九州諸藩へ上洛警衞仕候樣　倫旨御投下被遊大藩七八　闕下ニ參候仕り赫々之武威御覩被遊　其後ニ　敕使を以　關東ニ被　仰遣仁恕正義之命を以幕吏之心膽を挫き堂々之權威を以虛喝因循を碎き候時ハ威惠之御處置ニ恐怖仕不得已　敕旨遵奉仕可申候何分方今之憂先ツ人心之因循ニ御坐候ト角從古俗吏ノ因循を馭候術權威ニ非もしてハ不行樣奉存候今既ニ神州英武之氣を挽回し
王室を恢復もるれ大機會實ニ此時御坐候間早御英斷被遊度奉仰候臣土佐守邊疆微弱之國柄ニも候へ共唯　天意之隨意進退仕可申間微忠御採用被仰度奉存候已上

閏八月

右獻白案亦蓋瑞山ノ立按ナリ遺書中大同小異之草按點竄塗抹ノ者數紙アリ今其內ニ就テ稍ヤ脫稿ト思ハルヽ者ヲ寫ス

（瑞山會文書）

○文久二年閏八月下旬

○瑞山立案藩主建言書（其四）

（此書草按ノ儘村井修理少進ヨリ谷森外記ノ手ヲ經テ粟田宮ニヨリ乙夜ノ覽ニ入ルト云フ）

此度
勅諚を以て京師御警衞之仰を蒙り弱年不肖の身分として恐入候次第に候得共天下安危所係深被爲惱（宸襟）不容易時勢に候得者粉骨碎身一國之力を盡し候而遵奉可仕と苦心配慮仕候抑外夷跋扈手に餘り候根源は昇平久敷打續き因循偸安自然君臣の大義を忘れ幕吏恐怖を抱き姑息之所置有之より赫々たる神州國體を汚穢し往古未曾有之大耻辱を招き遂には智者あ

りといへども不能善其後之大害を釀し候段言語同斷不安次第に御座候是
故に忠憤義烈之士は慷慨切齒に不堪度度暴發も有之候得共幕吏之所置其
當を失するの所令然を不覺悟却て彼の輩を懲治し慘刻を極め益醜夷無饜
之求に應じ　皇國之疲弊萬民之愁苦を不顧聊かも愛國之心無之より諸藩
有志之士彌憤怒天下之變不可測に立到候處薩長二藩に於ては
天意を奉體仕り周旋盡力種々建議も有之兎角歸着仕候處は攘夷之一策に
有之其策に至ては尤一大難事にて容易に難取行詮(被カ)する處は根本を整へ不
申而者不相成事に御座候其根本を整へ候愚策左に具上仕候
一今日諸侯を見渡候に各相互に士卒を養ひ自ら緩急の用に相立候樣に候
得共皇國第一之京師におゐては却而防禦之御用に相立候者無御座候固よ
り諸藩より警衞仕候は當然之儀にて兼而其手當に相成居候得共外寇不可
測之時に至りては諸侯各其國を捨てゝ遠く京師を警衞仕候事決して難出
來事に御座候左候時は根本甚危く候間五畿內一圓御領に奉附
親王以下諸搢紳へ御分與被爲遊萬一不慮(虞カ)之戒有之共畿內一箇之力にて充
分御防禦相成候樣被爲遊度奉存候尤河泉二國を以て近江一國と御取替相
成候樣被爲遊度奉存候攝、山、和、江四國を以て御領に奉附之儀は則ち根本を
整え大根本と奉存候右四國之內にて從來封食仕候諸侯は幕府より自領を
以て裂(割カ)き與へ不殘其地へ爲移右四國は
親王以下御配置又諸國忠勇之浪士御召抱尙大阪邊豪富之者へ
叡慮之儘
被仰附器械戒(戎カ)具充分御手當被爲遊豫め防禦之御手配相立候其上にて斷然
攘夷之
勅を御下し被爲遊候樣仕度右被相行候時は乍恐萬民
天意を奉恐察不示して實意に基き必死之覺悟相極可申右方今御急務無此
上御事と奉存候
一幕府從來之規則諸侯之妻孥を江戸に置き每歲參府仕候に付財用缺乏之
國柄而已に御座候是れ全く德川氏諸侯を弱くするの權道に可有之候得共

如今外夷隙を窺之時に當り候に付諸侯參勤之規則は國之遠近路程之難易
を測り五年或は三年に一度づゝ參府候樣相成妻孥は各其國に就かしめ候
時は粉黛之給且奔命之費も無之江戸におゐても輻湊の口喙を減じ無益の
粮穀を費し不申自然富國に相成可申と奉存候
一政令は朝廷より御施行可被爲遊處にして往古は
天子躬ら訴訟を御聽斷被爲遊候處鎌倉置府以還壹是に權門に御委任相成
漸々君臣の分不分明習俗之久しき今に至ては幕府を遵奉の餘り畏くも
天子を凌慢仕樣に成行誠に以て奉大息事に御座候此度屹度名分御正被爲
遊政令一切朝廷より御施行に相成諸侯も亦直に
朝廷に參覲仕候樣被爲成度奉存候
右三條方今の御急務と奉存候間早々　御英斷被爲遊御施行相成候樣仕度
乍併今日一二の諸侯に被　仰含關東へ罷下り於彼地而假令每人に說諭周
旋仕候共斯迄苟且偷安の人情に陷り居候得ば決して遵奉仕候儀は有之間

敷却而幕吏の侮慢を受可申畢竟幕吏の遵奉不仕しるしは先達而被下候
勅旨御請乍申其實今以不被行且又此度一橋越前連署差出候紙面上に時勢
難被行など申處にて分明に御座候雖然今此儀不被行時は攘夷の謀も難相
立事柄に候得者一時の權議を以て兼而　勅書奉內願候肥後竝に因備二州
阿波を初め九州諸藩へ上洛警衞仕候樣
綸旨御指下に相成大藩七八　闕下に參向仕候樣相成赫々の武威を御觀め
し被爲遊其後に　勅使を以て關東へ被仰遣仁恕正義を以て其傲慢の心を
諭し權力權勢を以て其虛喝の意を挫き候時は寬猛の御處置に恐縮仕り
勅旨遵奉可申何分方今之憂人心之因循に御座候兎角古より俗吏之因循を
馭し候術權威に非ずしては不被行樣奉存候今方に　神州英武の氣を挽回
し　王室を恢復する大機會に御座候得者早々御斷行被爲遊度奉仰候臣土
佐守邊疆微弱之國柄に御座候得共唯　天意之儘に進退可仕微忠之愚慮萬
一にも御採用被仰付候はゞ難有奉存候以上

壬戌閏八月

百二十四

（瑞山會文書）

○文久二年九月五日カ　（姉小路公知ヨリ結城筑後守ヘ）

拜讀仕候昨日者以石山無沙と相頼候儀御承知種々御配慮何共々々深く忝次第に存候貴命至極御尤の御事何卒長の方へ可然御申込給る間敷哉土の處も可然哉ながら小子緣邊更に無く如何と心配仕候尙御勘考如何樣とも御盡力伏ゐ々々御頼入申候若し御差支無之候はゞ今夕御入來之儀相成間敷哉何か咄申入度任序御頼申入候也

筑後守殿　　公知

（瑞山會文書）

○文久二年九月五日　（姉小路公知ヨリ瑞山ヘ）

包紙ニ左之通記載有之

昨夜之一紙遂密閲（選カ）完璧候御落手可有之候也

九月五日　　公知

武市半平太殿

（武市家文書）

○文久二年九月八日　（瑞山ヨリ妻富子ヘ）

口上

あみをおり候黑のもおり壹枚大のへ御頼よて御越有へく候京都ハ寒き處よてはまり入候大野ゞ直ニくるきよ御頼よて御越有へく候用事まてかしゐ

九月八日之夜　　半平太

おとゑとの

（武市家文書）

西村武正、文意ニヨルニ津和野藩士ナルガ如シ

○文久二年九月十日　（西村武正ヨリ瑞山ヘ）

過日は初ゐ拜顔大慶奉存候其節内々主人へ建白致度旨有之ニ付拜顔相願

上候處其夜家老共ゟ同志之者を以暫不快に致し慎籠居候様申聞候子細は一月他出六度暮六ッ時限リ之門限至ゐ嚴敷有之候處不堪慷慨諸有志之快談ヲ承リ度他出過度夜歸リ等致シ候ニ付主人ゟ咎之不出前以家老之惠右様申付候事に御座候實以後悔先ニ不立噬臍申候右ニ付同志ゟも平日之强情ヲ以テ慎中建白様之事有之候ゐは遂ニ脫アルカ遇可申も難計候間決ゐ不相成候様申聞候右建白之事は同志之者へも少しも不洩事に御座候私も只今國え被歸候ゐは殘念至極當時形勢之様子にゐは一日も京師に滯留仕度勤王之微志御憐察被下候者ニ付私ゟ建白致候儀は默止申候間此段何卒不惡御聞取被下候ハ、難有奉存候其内慎解候へハ早々拜謁相願申上候薩州御藩田中君ゟも福羽文三郎へ御深情成被下過分之書感泣仕候田中君へは右之次第福羽ゟ傳吳候様忍ゐ罷出吳々申置候相達候哉自然御逢之節宜敷被仰上被下候様奉願候右建白默止之儀乍略義以書中申上候不遠拜顏を得申度ト樂罷在候時候折角御厭是祈

田中君、田中新兵衛
福羽文三郎後男爵美靜

重陽後一日　西村武正拜

武市半平太様
机下

一劍瓢然滯洛陽　向人慷慨說勤王
耳鳴清酒剛腸出　髯帶秋風義膽張
徒然中一律得半申候不能續思御笑草迄ニ御座候

（田岡正枝藏）

○文久二年九月十日（中山忠光ヨリ瑞山へ）
口述

昨夜面會之儀ニ付唯今早々武市氏平井氏兩人入來之儀賴入候談之上一寸書取ニゐも相賴候事も有之候哉右談之上取計度候間早々內々入來賴入候事

九月十日　忠光

武市半平太殿
平井收二郎殿

○文久二年九月十一日（中山忠光ヨリ瑞山及ビ平井收二郎ヘ）
口述
昨日ハ毎々入來相頼御苦勞存候其砌申入置候三藩ゟ御申立之儀如何相成候事ニ候哉心得迄ニ伺置候右仍早々如是候事
九月十一日　忠光
武市半平太殿
平井收（ママ）

（武市家文書）

○文久二年九月十一日（中山忠光ヨリ平井收次郎ヘ）
口述
昨日者入來御苦勞存ゝ抑其砌御噂之細川家之儀大納言へ申聞候處何分所勞之事故相役之内え御申立儀可然申付之事候仍右申入如之（ママ）候事
九月十一日　忠光
平井收次郎殿
追而昨夜武市氏入來之節申入置之處延引ニ相成事故先書取にて申入候也

（平井家文書）

大納言、中山忠能

○文久二年九月十七日（中山忠光ヨリ瑞山ヘ）
口述
明十八日朝之内入來相頼入候仍早々如此候也
九月十七日　忠光
武市半平太殿

（平井家文書）

○文久二年九月中旬稿

此書奉書半切紙ニ御家流ト稱スル書体ニテ認メアリ蓋シ敕使東下ノ時瑞山幕吏ニ諭スル時ノ袖扣ヘナリ

敕使ガ幕吏ニ諭スベキ袖扣ニシテ瑞山ノ立按ナリ

是迄從幕府言上之文書等ニ被仰進或も思召等之文字被用候右も全被對
朝廷敵禮之姿ニ相成御不都合之事ニ候追々
君臣之名分被正候上も右等之文字も勿論敵禮之姿ニ相當候文体屹度改正
可有之事
但右も近々
敕答御請可有之ニ付從今度速ニ改正有之度事　（武市家文書）

○文久二年九月二十日　（石川潤次郎ヨリ樺山三圓ヘ）

石川潤次郎名ハ眞義池田屋ノ變ニ斃ル

未得貴意候得共御高名兼々承候ゟ乍不遠慮以寸楮得御意候深秋之候御賢
勝可被成候動定奉大賀候小生昨日當御表着仕彼是御厄介相蒙候乍早速就
當時態御高論承度候處於旅館大ニ混雜仕御細談難相調御構も無御座候ハ
、貴邸ゟ罷越申度奉存候間是非ニ御面接被下候樣御取計被下度奉希候同
藩武市半平太ゟも被托候儀も有之候間兎角拜聲萬々得貴意度早々閣筆
九月念　　石川潤次郎　百拜
樺山三圓君
机下　　（樺山家文書）

○文久二年九月二十日　（中山忠光ヨリ平井收次郎ヘ）

口述
可令面會之處少々子細有之ニ付今酉剋後三條木屋町武市亭ゟ參入候間其
儀不惡賴入候也
九月廿日　　（平井家文書）

○文久二年九月二十六日　（中山忠光ヨリ瑞山及平井收次郎へ）

口述

申入度儀出來ハ條ハ用閑ニ後候得ハ入來之事相願候事

九月廿六日　忠光

武市半平太殿

平井收次郎殿

（平井家文書）

○文久二年九月廿八日　（瑞山ヨリ妻富子へ）

卷表ニ「十月十日ヨ此狀つく」

もやおひ

早追のたよりニ鳥渡差立る

一筆申進候冷次カ第寒相成候處姉上さはハ初皆々御きゝんよく御暮しと存候爰

姉上さは、奈美子

元ぶし氣遣有間敷存候扨

○文久二年九月二十六日　（中山愚光ヨリ瑞山及平井收次郎ヘ）

口述

申入度儀出來ル條ヲ用閑ニ後候得ハ入來之事相願候事

九月廿六日　忠光

武市半平太殿

平井收次郎殿

（平井家文書）

○文久二年九月廿八日　（瑞山ヨリ妻澤子ヘ）

卷裏ニ「十月十日ヨ此狀つく」

もやおひ

早速のたよりニ鳥渡差立る

姉上さま、奈美子

一筆申進候冷（次カ）第寒相成候處姉上さまハ初皆々御さゞんよく御暮しと存候爰

元ぶし氣遣有間敷存候扨

同年九月晦日粟田口仕置場向ノ岳ニ切掛首三メ如圖

三條屋敷西組與力

渡邉金三郎

歳齡四十五六歳

大川原重藏

御池屋敷東組同心
大河原重藏
年廿六七歳

御池屋敷東組同心
大河原重藏
年廿六七歳

森林孫六

同東組同心
森林孫六
年頃五十五六歳

說曰右之外古屋敷西組同心上田助之丞以上四人之者共江戸表ゟ御尋之儀
有之急御召依之九月廿三日早曉京出立同夜石部宿泊り而夕暮大勢之
侍ニ切殺され候由

同東組同心
木林 孫六
年頃五十五六歳

說言右之外古屋敷西組同心上田助之丞以上四人之者共江戸表ゟ御尋之筋有之急御召依之九月廿三日早暁京出立同夜石部宿泊りニ而夕暮大勢之侍ニ切殺され候由

右罷書寫

右之者戊午年以来永野主膳嶋田左近等之大逆謀ニ與シ加納繁三郎
上田助之丞等之諸奸吏共ト心戮合古来未曾有之御国難ニ醸シ聊カ
も國家ニ憂患者ハ悉無名之罪ニ戮羅織シ甚敷ニ至而死流之罰ニ用
已之毒計を逞せんと致必天地不可容罪状一ツ不遑枚挙依之加天誅
ものや

戊九月

裏

石部驛三宿ニ於而不計禍生候ニ付地頭具町内ニ可相
恤若其儀於無之者追ニ可及誅伐候以上（寒胆帖）

（元治元年六月以降瑞山一党鞫獄ノ條参照）

島村衛吉重險
小笠原保馬正寛
岡田以藏宜振

御敕使江戸へ御下りニ付太守様も江戸へ御下りヱ事ニ相成來月十二日御
發駕と申ニ相成候爰元初衛吉安馬い藏なと皆々　敕使ヱ御供ヨて江戸へ
下り申候十二月の初頃ヨヲ又此地へ歸り申へし都合ヨよれハもやく又都
合ヨよれハ十二月の末ニなるへし我等ヲ　敕使の御側ヨ付き江戸の御城
ヨ出ふれ候ても付てゆくよし右ニ付のし免長上下なと入用のよし可笑事
のふ

一久留米の眞木和泉と云人のいもふと小棹と云女十七歳

一ト筋ヨ君のミヨめと身狡もてゝ
雲の上まて名をも上けなん
あヨ糸のみヨれしすおヲ去ふねとも
もやうおとけてあヒん
此和泉の弟ゞ京都へ出る時ニよみ候よし是ハ此春の事なり和泉ヲ長門國
赤間關ヨてめしとふれ弟ハ其處ヨて服を切候よしなり

もゝおし澤山おれとも取早ねふゐしあふ〳〵らしゐ

九月廿八日の夜　半平太

おとゑとの

皆さはへよろしく

何事もつぎのひきやくニ申へし　（武市家文書）

○文久二年九月廿九日　（中山忠光ヨリ瑞山へ）

口述

御用閑ニも候得ゝ明日入來相頼入度存候事

九月廿九日　忠光

武市半平太殿

追而今日ゝ當番ニ候間明日相頼候事　（武市家文書）

○文久二年九月廿九日　（德田隼人ヨリ瑞山へ）

武市半平太様　德田隼人

内用　口演

愈御壯健被成御坐且

御主君様

敕使御隨身御東行ニ付而ゝ必御供之義与重疊目出度御事ニ奉存候扨大口名前ニ而侍從殿方之一封則爲持さし上申候御落掌可被下候萬一事變候義も御坐候ハヽ早々下拙迄御内々被　仰聞可被下候當時ニ而ゝ大キゝ心解ケ候様子ニ見受安心ハ仕居候得共此段爲念得貴意申候早々頓首

九月廿九日　（上田開馬藏文書）

大口出雲守（中山家家士）侍從、中山忠光

○文久二年九月下旬　（瑞山ヨリ妻富子へ）

十二月二日つく

岡村甚三郎あてよて差立候

宮様よりいたゝき候菓子此度品もの入として差立候間御受取有ゑく候

勝賀瀬田内前小笠原邊へ御ゐけ有へく候

此間も田中ゟ歸りに

親王様よりいたゝき候ゟし相頼候間田中作兵歸り著候ハヽ御受取有へく

候ゟしゑ

（武市家文書）

勝賀瀬田内前小笠原保馬小八郎衛吉ノ養父喜三次、島村家

○文久二年十月朔日（高崎左太郎村山齊助ヨリ瑞山へ）

今日は御出會之儀藤井良齋（節カ）え被仰聞候由右に付本田藤井兩人は差限り候

用向にゑ難罷出候故小子共小南様御寓居迄致參上候處今外出之由承候ゑ

罷歸申候就ゑは御兩藩之處御出會御咄合被成下候ハヽ其段明日にゑも參

上拜聞可仕（衍カ）仕候今日は國許ゑ小松帶刀上京之筈夫故多用取紛右御斷旁恐

小南五郎右衛門

々此段得御意候已上

十月朔日

高崎左太郎

村上齋（ヵ）助

武市半平太様

（田岡正枝氏藏）

○文久二年十月四日（瑞山ヨリ妻富子へ）

下横目

濱田守之丞

守丞御國へ歸るニ付

たより有之文さし出候皆々御機嫌よき事とそんし候爰元ふし氣遣有間敷

候

扨　敕使御下向ニ付太守様も江戸へ御下りニ相成來ル十二日　敕使御立

太守様ゑ十一日御立と相定り候我等事ゑ　姉之小路様の雜掌（さつしよう）と申者ニな

り柳川（やなかはさ）左門（もん）と云名を姉小路様より下され候

太守様、豐範

本棒の籠よのり若黨二人槍持そふり取具足櫃はさん箱をもたせ候都合六人つれ候其内よて丑之丞と丑五郎とを若黨ニつれる筈よて候誠よ狂言の様な事なり右ニ付別紙之通の入用よおまり入候されども江戸へいたれい御城へも出又將軍へ御目見もをる由ニ又々ん上物もをるよし又將軍様より何ら拜領物もあるよしなり誠よふしぎな事此らしい御くげさはよりいゑゝき候ニ付前へも御ゐけ有へく候又

前、島村家

天子様より下され候菊の花前へさし立候扨咄もあれとも大取紛次便ニ申へしらしゐ

十月四日　半平太事　左門

おとゑとの

柳川左門と云ゐ江戸へいて又京へもとるまでの名なり　（武市家文書）

○文久二年十月十日（瑞山ヨリ妻富子へ）

此間姉小路少將様の御門出よて始てれしめ麻上下よて籠よの初御供致し祇園社へ御出よて其上の寺よて御やをみ御上段の間へめされ御盃いさゞき夫より御歸り被遊候扨れしゑの下著よゐ白むくをきねいおふに又々白むく小袖むんぎむゑき三枚白をおしらへ候扨難有き事いきのふ　青蓮院宮様へ御いとまごひニ出候處せんゐつとして三德とたゞおゝ入扇子御盃をいさゞき候又々ふい正親町三條大納言様へ出候處是又御餞別として三德と扇子をいたゝき候夫より大原三位様へ出候處是又御せんべつとして風呂敷の様なものいさゞき其上御酒下脱カされ何角御咄よて日暮前より出四ッ頃御暇乞申上歸り候誠よ此上もなき難有き事なり其内宮様より拜領物などゐいの様願ふても出來ざるものよて我等ゞ少々の志の天よ通し候故と落涙いさし候皆々よろこひ有ゐく候たよりのありしだん差立申ゐく候扨むかしも澤山あるゞゞふも朝あふ諸方へゆきもむや夜もふけあをも山

のおとく用事有之其上太守様の御立ゆへ早々おきんとなふに先ゝ申ふる
ら申留候らしル

左門

十月十日の夜
おとゑとの

（武市家文書）

○文久二年十月初旬（瑞山ヨリ姉奈美子へ）

姉小路少將御行列

御先拂　御歌書櫃　御箱　御番士　（此組ハ皆々御中屋敷ト云）清岡治之助
御箱　御番士　森助太郎
岡田以藏
曾根東吉　弘瀨健太　阿部多司馬
高松太郎　御近習　同　御沓
松山熊藏　御輿　丁十人
御近習　同　御傘
多田鐵馬　松田金三郎

御茶辨當　御割箱　御用箪笥　目籠　具足箱　（若黨）村田丑五郎　（若黨）柳川左門　（若黨）赤岡丑丞　雜掌乘物

若黨　鎗
鎗　若黨
箱　草履取　具足櫃　雜掌乘物　草り取　御用人乘物
若黨　箱

若黨　鎗
草り取　御目附　下目附　鎗
草り取　加番
草り取　御側駕籠

惣供　笠籠　竹馬　家中兩掛ケ　小頭預り　兩掛ケ　押

御姉上さまへ　半平太
御覽ニ入候

（武市家文書）

文久二年四月八日吉田元吉梟首罪狀書參照

○文年二年十月七日（那須信吾ヨリ父俊平ヘ）

極密人前御無用

當春本間精一郎檮原ヘ參リ候節ヨリ天下之時勢委敷承リ實ハ（イは）私儀佐川ヘ參リ候抔ト（イと）申シ時々出府仕リ有志ノ人ニ付キ合ヒ政府ノ事ヲ能々聞合セ其往返鼎公ヘモ計リ何分此頃ノ時勢其上大奸物旁以テ元吉ヲ退役爲致不申候テハ勤王之事行ハレ申間敷ト申事ニ至候不得已（イ止）ハ刺除クヘキナレモ成丈ケハ平穩ニ退役爲致候ヘハ靜謐ニ事足リ候トテ大學樣雅樂助樣民部樣其外御家老中頻リニ御世話被遊候得共御力ニ及不申遂ニ四月朔日ヨリ彌刺スニ極リ同志之者共毎夜毎夜場合ヲ伺ヒ候處既ニ八日夜機會ヲ得猶又同志共能々盟ヲナシ其内首請取獄門ニ掛ケ且私共荷物ヲ持候者共十人計四半・橋（脫アルカ）觀音堂ヘ廻シ置キ候扨最早夜半前登城ノ歸リヲ私共帶屋町ニテ待受ケ先ツ私後ヨリ首ヲ見込ミ唯一ト打チト思ヒ刀ヲ下シ候處傘ニ障リ淺手ニテ彼ノ者直ニ見返リ拔合セ聊斬合候處ヲ外方ヨリ段々手ヲ下シ否

佐川邑主深尾鼎重樽
山内大學豐榮
山内雅樂助豐積
山内民部豐範

彼ノ者、吉田元吉

斬伏セ直ニ私首ヲ取候内餘ハ觀音堂ヘ引取私首ト刀ヲ側ノ小溝ニテ洗ヒ用意ノ下帶ニ包ミ提ケ唯一人帶屋町ヨリ南奉公人町通リ西ヘ參リ候處毎々犬ニ吠ラレ既ニ首ニ喰ヒ下リ可申程近寄リ大ニ迷惑仕候得共如何樣無難ニ觀音堂ヘ持付(イ附)ケ同志ニ相渡シ安堵仕(イナシ)リ夫レヨリ寛々荷物手槍等受取旅支度取調ヘ乍暗夜一同懇ニ暇乞シ且又於京師機會ヲ待テ死ヲ共ニスヘキ事ヲ約シ西ニ向ヒ候處今コソハ父母ノ國ヲ去ルノ期ナリ又再ヒ生キテ歸ル事モ覺束ナシト思ヒ窃ニ涙ヲ拭ヒ大石團藏安岡嘉助ト三人シホシホト暗地ヲ歩行佐川岩目地ニテ夜明(中略)十一日未明馬上ニテ打立松山城下ヘ晝過キ著夫ヨリ歩行ニテ七ツ前三津ノ濱ヘ著幸ナル哉直ニ出船有之直樣打乘リ(中略)上京長州同志ヘ面會同居致居候内追捕頻ニ烈シク相成長藩有志ヨリ薩ノ同志ヘ賴ニ相成候處直ニ島津三郎樣ヘ御聞ニ入リ五月十六日薩ノ同志海江田武次吉井中介兩人ノ旅宿ヘ引移リ居候處二十二日三郎樣御東下ニ付右兩人御供ニテ候ヘハ外輪旅亭ニテハ不工面ニ付二十三日御邸

海江田武次、後子爵信義、吉井中介、後伯爵友實

中平龍之助

内ニ入ル誠ニ以テ御叮嚀ノ御扱ヒ實ニ驚入候(中略)八月中旬ヨリ夜分ハ往來仕居候邸中ノ事故門刻四ツ限ニ付夫迄ハ段々奔走シ中平氏ニモ面會父上樣御志ノ事ヲモ委敷承リ大ニ安悅仕候過シ一昔ニ近キ丁卯ノ春幾千代目出度親子ノ御契約仕リ依御慈悲テ是迄武門ニ志ヲ伸ハシ月日ヲ送リ候上ハ親子ノ内ニ於テ一點ノ隔意有間敷譯ナレモ畢竟私愚昧ヨリ不行屆ニシテ御深意ノ程得伺ヒ不盡故此度ノ一條ニ付思召ノ程ヲ恐レ憚リ且此頃ハ數多ノ海陸ヲ隔テ潛伏ノ身ト成居候得共此上ハ異體同心ト乍恐奉存候間若シ此地ニテ可然機會ヲ得候ハヽ志ヲ抱キ快ク相働キ可申候内ノ事ハ俗事萬端宜敷御配慮奉願候(以下略)

右跡ヤ先分リ兼候得共御閑暇ノ節御慰ミノ一端ニモ相成候ハヽヤト奉存拙文ヲ綴リ指出候返ス返スモ人前御無用ニ奉存候

十月七日認

(瑞山會文書)

○文久二年十月十四日（五十人組脱藩届書）

乍恐此度　叡慮ヲ以關東御紀律御一新之折柄恐多モ　容堂様ニハ重キ
敕命ヲ被爲蒙諸事御周旋被爲遊候御事御當家ノ御面目ハ不及申上國家ノ
大幸不可過之孰モ難有感激仕候乍去大名之下ニハ久ク處シ難ク大功之所
在者衆怨之所帰ニシテ古今其例不少既ニ此度諸大名様御參勤格別御口ニ（イ弛）
相成候ヨリ万端御簡約ニ趣候段實ニ絶世ノ御英斷富國强兵之基礎是相立（自脱カ）
可申ト心有者ハ誰レ雀躍不仕者無御坐候處是迄御府内ニ罷在候町人共ノ
中ニモ無頼之族者却テ是ヲ奉怨哉ニ御坐候畢竟御府内之義者申上ニ不及
海外ニモ稀成繁華ニテ別テ無上下無輕重自四方入込候人十カ七八ニ候得
者市井無頼之者共是ニ依テ光陰ヲ送候處今日ニ至リ追々人鮮事簡相成候
而者平常遊手座食之輩者必至口腹ニ差泥ミ自然種々ノ不義ヲ相企候者顯
然ニ御座候左候得者平常無事之御家者何之可恐儀モ無御座候得共正義之
御家ニテ少ニゐモ天下之事ニ御關係被遊候ゐゑ屹度御覺悟不被遊ゐゑ相
成申間敷既ニ　先達テ　此方様御登城懸リ御途中無頼之者共馳集耳目
ニ堪兼候廉モ御座候哉ニ傳承仕候是等追々相募候得ハ以後如何様ノ溢者
出來候程モ難計一日モ早ク御人數被差遣御往來御供廻其余遊兵等格別御
差備不被遊ゐゑ難相成様奉存候先達ゐ櫻田坂下之浪人共ハ孰モ正邪利義
之分別有之者ニ候得バ覺有御家者恐ルヽモ當然ニ候得共正義之御家ニ於
テ萬々可恐儀者無御坐市井無頼之族ニ至テハ邪正義理ハ差置所爭ハ飢寒
死生之間而已ニ候得ハ實ニ可恐ノ至リニ御坐候千金之子ハ不死盗賊ト申
事ニ候得ハ如何程御用心被遊候迚モ決ゐ御臆病トハ申間敷奉存候右者万
々有間敷筋ニ候得共不虞之禍ハ何時無之モ難申其期ニ至リ後悔無詮事ト
存込不顧非分是迄同志之者共達々奉言上候得共未ダ何等之御處置モ無御
坐如何之御事ニ候哉一同疑惑仕候乍去微賤之身累代御國恩ヲ奉戴候得バ
此期ニ至リ片時モ難安寢食一日モ早ク彼地へ罷越九牛ノ一毛ニテモ御役
ニ相立申度奉存候不得止一同申合又々奉言上候間御聞届被仰付度奉存候

右者私共過半小身者ニ罷在平常口腹ニ差泥ミ候者モ不少且老年ノ父母ヲ扣ヘ難捨置者モ御坐候得共兎角君上之御安危國家之御大事ニハ難易儀ト一圖ニ存込及右次第候間全ク喪心犯(狂カ)氣之御取扱ニ不日不被仰付候者ハ此上難有仕合ニ奉存候以上

文久二戌年十月十四日

新四郎嫡孫　山本三治
清右衞門倅　島地磯吉
清平弟　望月龜彌太

森藤太夫殿
寺村義平殿

右之外大同小異ノ願文ノ由ナリ

（佐佐木高行日記）

○文久二年十月十八日（山内容堂ヨリ松平春嶽ヘ）

爾來如何御消光　霜威相加候間御自愛可被成候唯今大監察と談論相濟候所三寸の舌殆んど切れ申候乍去至結局なる程それでは左樣の所までは氣が付きませなだつ(かカ)たと申候位にて別れ申候又々明日は登城閣老を責め可申と存候何分足下早々御出勤此德川氏の危急御救可被成御家柄と云御職掌と云此時に當り欝々然臥病候譯無之御勉强可被成候僕は不才非力にても盡す丈けは御座候間書外期面盡候恐々

初冬旬八

越相公閣下

九十九洋外史

尙々御疾病は御厭可被成候以上

○文久二年十月二十二日（山内容堂ヨリ松平慶永ヘ）

刑君德川慶喜
板倉周防守勝靜
小笠原圖書頭長行
松平豐前守正質
水野和泉守忠精
井上河内守正直

唯今退出卽一書呈上仕候刑君不參右に付板倉小笠原一橋へ參不得面會候豐前和泉河内へ面晤候所實に京を御尊ひ無之は不相成云々彼より發言僕曰いかにも左樣無之時は不相濟候僕又敕使着の節は品川へ迄大君御出迎可然井上の小僧曰く餘り尊ひ過候ては諛には成間敷哉此時僕不堪憤恕向小僧曰君臣の大義を以て申之　足下の如論則吾輩の家來吾前に來り疊に頭を付候是亦諛にて御座候哉少々大聲に相成候所二言は無之閉口に及候今日は昨日より閣老も誠實尊卑はならぬと存候樣子也

十月二十二日　　醉璋

閑鷗　樣

（侯爵山内家文書）

御兩卿、三條實美、姉小路公知

○文久二年十月廿二日（瑞山ヨリ平井收次郎へ）

當月十六日之貴書相達拜讀愈御勇猛御周旋奉賀候御兩卿御順之通御越恐悦唱申候然は一橋公之（處脫カ）如何敷聞申候因州侯急々東に下周旋之敕御下に相成候はゞ都合よき事と兩卿御詮議も有之旁世子格太郎差立申候此仁は實直にて隨分咄之出來候人故萬事御談話被成度奉存候其御地之模樣はさして入用になき事まで乍御面倒委敷爲御聞被下度奉存候薩之高崎長之桂抔へも御面會奉察候

世子格太郎、名ハ延世伊勢松坂ノ人
高崎佐太郎、後男爵正風
桂小五郎、後孝允

容堂君も大によろしき御勢と聞御互に喜躍事に御坐候右迄申上度如此御坐候頓首

十月廿三日　　柳川左門内（カ）

平井收次郎樣　　（田岡正枝藏）

○文久二年十月廿三日（德田隼人ヨリ瑞山へ）

以幸便一翰拜呈仕候向寒之砌ニ御坐候處益御壯健ニ而御旅中無御滯御著府被成候御事与重疊目出度奉存候隨而下拙儀無異ニ消光仕候間乍憚御放

意可被下候

一去ル廿日因州侯參

内御内敕ニゐ翌廿一日當地出立ニ相成申候右も一橋君御柔弱ニよつて萬端御心添御座候樣ニとの事ニ御坐候由御内々御模樣相伺候事ニ御坐候

一久坂玄瑞寺島忠三郎今度早打ニゐ江戸表へ下向ニ相成申候間京師之義も彼方ゟ巨細御承知可被下候

一去ル廿日之夜亂法者御坐候ゐ寺町丸太町上ル所ニゐ万里小路殿家來小西直記ト申者及横死候其夜五辻殿下部四ヶ所切レ町人貳人切レ申候右樣之亂法もけハ取調度候得共官家ニゐも不及事ニ御座候（ヲ脱カ）

一三條殿姉小路殿御機嫌克御著被遊候御事と奉存候

敕答之趣早々奉拜聽度奉存候御幸優ゟ御樣子早々被仰知可被下候

一大口達者ニゐ專周旋仕居申候

大口出雲守

侍從ハ中山忠光

一侍從殿無異ニゐ劍術等心掛出精被致候增々青雲之志相見大慶之事共ニ御坐候外ニ相替儀も無御座候得共右之段迄得貴意申候猶斯重優（ママ）候

恐惶謹言

十月廿三日　　德田隼人

武市半平太樣　　愛敦

參人々御中

尙々乍末時候柄折角御厭被成候樣奉祈上候

一小南樣幷丁野樣へ御序之節宜御傳言可被下候已上

小南五郎右衞門　丁野左右助

（上田開馬藏文書）

○文久二年十月廿七日（中川侯一件手島八助乾作七書取）

一左ノ書面ハ當時京師表周旋掛手島八助乾作七ヨリ土佐ニ送リタルモノナリ

手嶋八助、後季隆

十月二十七日朝長藩桂小五郎佐々木男也粟田宮様へ參殿法親王被仰出候ニハ中川修理太夫家來小河弥右衞門ヲ嚴罰申付致幽閉候其徒中川土佐始嚴罰申付候様以之外之事也彌右衞門儀ハ先達ゟ勤王正義ヲ唱速ニ上京危急之場合周旋致シ實ニ勤王ノ巨魁ト可謂也事少シク平穩ニ相成候節至尊御叡感之上御褒文ヲ以本國へ御差下定テ修理太夫賞譽モ可致筈之處右之次第言語同斷之事畢竟　天意ヲ輕蔑之有様皇國振起致候哉否之場合箇様之事一藩之諸侯ヨリ相顯シ候テハ不安事也殊更此度　勅使下向重大之　敕諚幕府遵奉之程叡念奉煩候時節且又外ヘモ大ニ關係致候事モ有之旁以決ゟ其儘ニ差置候義難相成主上ヘ申上三藩申合此度修理太夫出府之趣何地ナリ共通行之道筋ヘ罷下リ幾重ニモ説得致シ万々一承服致不申時ハ違勅之宛所置致候事可然尤薩土ハ主人在京無之如何致候哉如何様薩藩ハ爲警衞人數許多在住土州ハ幸ヒ大坂表警衞之人數差遣候ニ付其人脫カ數差立候事當然之事

欤ト被仰出候

一　二十八日　朝薩州村山齊助關白様へ參殿々下被仰聞ハ三藩申合修理太夫ヘ承服遵奉致候様候説得可致トノ御沙汰若モノ事難計ニ付伏見ヘ人數差向候儀モ御内沙汰之由ニテ薩州ヨリ百五十人計遊兵出張長州ヨリハ五十人計御國住吉御警衞之中御人數出候筈

一薩藩下坂之両士村山齊助鴉木孫兵衞ヨリ御國京師詰之人ヘ懸合紙面

廿九日初夜頃著坂直様長州両士ニ桂小五郎佐々木男也引合三藩同意ニテ岡之屋敷ヘ出懸熊田万八ヘ出會重大之御内沙汰ニ付罷下候間君公ヘ御面會相願度段申述候處所勞彼是及夜陰何分面會ノ所ハ相斷重役ヘ委細申聞吳候様トノ儀ニ御坐候得共押出シ及演舌候處無據出席ニテ一同君公ニ面會致シ小河一列處置不宜

朝廷ヲ輕蔑被成候姿ニ相當殿下幷宮様議奏方御憤懣之趣委細申述候處色々申訳有之畢竟イヽマギラシ直様上京トノ趣意被申述候處

猶又此儘ニテ御上京之儀決ゐ不宜重々不都合之理解申上候處夫ヨリ篤ト勘考之上追テ可及返答段被申聞別室ニ差扣候處熊田要助小原隼太其外重役衆彼是出席ニテ嚴敷恐入候趣樣々及陳謝何レモ明日ハ滯坂ニテ重役ヨリ京師ヘ使者差立候テ恐入申上御差圖次第ニ進退可仕トノ趣承リ候先今日ハ三藩一同引取申候然處修理太夫殿初重役ハイツレモ其實俗吏俗論取ニ足ザル人物ニテ中々勤王ノ者ナドハ夢ニモ不存輩計ト相見唯々恐怖致候マデノ事ニ御坐候尤小原一列赦免之事ハ大体役々承知之模樣ニ候得共今夕迄ハ決定之返答ハ無御坐候（御國周旋掛リ乾作七手島八助兩人）

右紙面薩藩ヨリ相廻候趣御國取扱之委細ハ畧之然ニ小河彌右衞門一列根元致脫藩候者之儀ニ付縱令動王之志トイヘドモ對主家シテハ非常之筋ニ付純粹忠士トハ難申處　叡慮被思召旨御內命乍恐如何敷然處右　叡慮島津三郎樣ヨリ彌右衞門ヘ被仰聞御書下ニ相成候趣是又

（右紙面以下ハ侯爵佐佐木高行ノ記スル所ナリ）

如何之儀實ハ薩州ヨリ　叡旨御願出御取持ニ相成候哉然共右樣　叡慮奉蒙御用之節可抽忠勤トモ被仰付有之輩ヲ猥ニ幽閉被申付候中川侯之御處置最有間敷事　朝廷ヲ輕蔑ニ相當候然ニ同藩小河同志之者ヨリ隱名之書牘ヲ以長藩ヘ願出彌右衞門一列御咎之儀畢竟奸臣共所爲之由委細國辱ヲ發露シ何卒彌右衞門列被差免奸邪之輩被退候樣頗煩擾ニ認周旋賴出候趣是亦有間敷儀右等之事迹ヨリ相起粟田宮樣御下知ニ相成候趣

（佐佐木高行日記）

○文久二年十月廿七日　（中川侯一件手島八助筆記）

一手島氏筆記ニ云フ

小監察ヲ以小原與一郎乾作七手島八助西京ニ相詰同年（文久二年）十月二十七日夜半平井收次郎來リ云フ此度中川藩小河彌右衞門以下十七士先達テヨリ上京周旋ノ筋

三郎君久光、嶋津

中川侯久昭、中川

桂小五郎、後木戸孝允、村山齊助、前名木村仲之丞、北條右門、後村山松根

叡感之御書取薩州三郎君へ御渡ニテ彌右衞門以下拜承八月帰國ス即チ岡侯右ノ者共禁錮嚴敷親戚之書信ヲ絶チ其内一士某大禍ヲ遁ルヽ者窃ニ薩藩ニ訴フ　朝議御不興ニ被思召中川宮ニモ以ノ外御忿恚ニゐ三藩打合中川侯出府ニ付説得致シ東行ヲ差留若シ彼カ不敬甚シクハ征討スベシトノ事ナリ中川侯ハ關東へ御用召ニテ老中職欲寺社奉行欲蒙ルノ説ナリト其夜與一郎作七八助同道ニテ大監察横山覺馬方へ到リ收次郎モ來リ永談ス翌廿八日未明覺馬與一郎作七八助同道シテ長藩前田孫右衞門僑居へ行同藩士桂小五郎佐々木男也モ來ル薩藩村山富助（齊カ）モ來ル富助（齊カ）云フ今朝關白殿下へ罷出候處中川修理大夫へ朝廷御不興ノ處説得ニ可致万一承服不致事モ難圖ニ付三藩ヨリ人數兼テ伏見へ差出シ可置ト被仰出也ト然ル上ハ異議無之訳（マヽ）ト申テ孫右衞門方ヨリ歸ル覺馬ヨリ作七八助両人浪花へ罷越シ薩長ト示シ合中川旅館へ罷出朝議ノ御旨ヲ以説得可致ト被申付タリ

覺馬ヨリ攝州陣屋総督村田仁右衞門大監察郷權之丞へ人數伏見へ出張之作配致候様早追ヲ仕立七ツ前両人京師出足翌廿九日大坂著長州邸へ行桂小五郎佐々木男也出會薩藩村山富助（齊カ）鶴（カ）木孫兵衞モ來リ同道シテ夜四ツ時中川侯旅館へ罷出留守居熊田万八出ヅ修理太夫様御目通仕度申談候上万八申ニハ主人病氣ニ付重役ノ者へ被仰聞度ト申用人草刈敬助出會主人出立之砌病氣ニ候得共押ゐ罷越シ候處寒氣ニ被障當夜別ゐ不快ニゐ寢所ニ被入明朝ハ押ゐ發足致シ上京可仕心得ニ御坐候仍テ家老ノ者迄被仰聞度トノ事ト云對ゐ申ニハ明朝御發駕被遊候得バ猶更差懸リ當夜不申上候テハ相叶不申縱令御上京ノ思召ニ御坐候トモ其儀ハ御調被遊間敷ト奉申上候斯申上候儀ハ重大ノ事件ニテ何分御取次ニテハ難申上御病氣ニ被爲在候得バ御寢所へ罷出申上度乍恐御家ノ御浮沈ニモ相係リ候儀ニ付尚此ノ筋被仰上候様申述候處敬助仰天シタル氣也（色カ）ニテ立出稍刻移リ再ヒ來リ被仰聞旨達候處

主人當家浮沈ニ懸リ候程ニ付テハ各方來臨別ゐ忝被存候ニ付乍病中推ゐ面會致サレ候ニ付御通リ被下候樣トノ儀ニ付即チ一同罷出御膝下ニテ申上候宮樣關白殿下御内命ノ趣ハ御家來小河彌右衞門御嚴罰被仰付候一件等　朝廷御不審ノ達々申上候處候種々御取合ニテ御申訳被仰出候處御條理分明ニ難相分其内彌右衞門儀ハ　叡感之旨モ有之於我等難有奉存候乍去右ノ者毎々國法ニ戻リ無余義子細モ有之其儘差置候而ハ家中ノ者ヲモ心服不致我等固ヨリ勤王ノ儀ハ代々家風ニテ有之候得共家來共心服不致ゐハ却テ勤王ノ本意モ難相立譯ニゐ此段ハ推量可給乍去朝議ニ背キ候段ハ誠ニ御恐レ入候儀ニ付此段尙又上京ノ上御斷可申上ト被仰出候處押返シ申上候ハ御意ノ趣一應御尤ニ奉存候得共殿下御内意承リ候處當時天下弊習御一變被遊度　叡慮被惱候折柄彌右衞門カ如キ者數輩先達テ上京周旋ノ筋　天意ニ相叶　叡感相蒙リ候儀　朝廷ニモ御美目ニ被爲有仍テ於御當家樣モ御賞譽可被爲在筈ノ處却テ御一家ノ法令ヲ以テ斯ク被仰付候趣　叡慮御遵奉ノ御誠心トモ不相見御一家ノ法令ヲ以　天意御塞ギ被遊候ゐハ大ニ外々諸侯ヘ關係殊ニハ當今幕府ヘモ重大ノ事トモ　敕諚被仰出於幕府　叡慮必ズ遵奉可相成場合且又戊申年以來御制度ニ相背候者共報國盡忠ノ節（筋カ）ヨリ相犯候者追々御赦免モ相蒙可申哉ノ御沙汰モ御坐候趣於御當家樣御齟齬ニ相成候而ハ　天威モ御立不被爲成誠ニ御恐レ入候事ニテ第一天下御革政ノ御妨トモ可相成彌右衞門其儘難差置事跡ニ御坐候得バ殿下ヘ御伺ノ上御所置可被遊訳（ママ）ト奉存候此段御手落ニ御坐候哉ト奉存候乍併右ノ儀先　主上ニハ御叡聞不被遊立リヲ以朝議御内命ノ儀ニ付私共申上候筋直樣御悔悟被遊候得ハ御當家樣ノ御爲朝議ノ御趣意モ相立御都合宜御事欤ト不願憚申上候別ゐ粟田法親王樣ニハ御不興ニゐ御途中御遮申候樣御意モ御坐候尙御勘考被遊候ゐ何分ニモ明朝ノ御發駕ノ儀ハ御延引被遊可然哉ト奉存上

粟田法親王、即チ中川宮青蓮院宮

候段達々申上候處大ニ御恐怖ノ御模樣ニテ其元共申處朝議御不興相蒙候ゐハ奉恐入候次第ニ付此上ハ篤ト考慮致シ各方是迄被參候儀御苦勞千万不淺忝存尙家來トモヘモ誤吳度其上ニテ各方ヘ相賴候儀モ可有之トノ議ニ付一同御挨拶申上殊ニ御不例ノ御都合不奉顧推參重々恐レ入次第申上候ゐ退出仕候

但右ノ節重役ノ面々肩衣著シ八九人列座ニゐ候御一人御應答ニゐ此方ヨリ別ゐ村山桂両人申上候殿下御内命ノ筋齊助申上天下重大ノ御革政ノ筋ハ小五郎申上宮樣御不興ノ條ハ男也申上　叡慮御戻ト御國法御立被遊ト輕重大小ノ區別ヲ以御勘考被遊候儀ハ八助申上明日御發駕御延引被遊候筋ハ作七申上候ナリ

暫クシテ別館ニ被延重臣七八人出會主人ヨリ吳々モ挨拶被仰出此上ハ兎ニ角御三藩ヘ御依賴申明日出達ハ被差止其内手元取調御答ニ可及申ニ付返々モ不惡樣御量見ニ預リ度段申事ニ相成候ナリ七ツ半頃御旅館ヲ出相分レ下宿ヘ帰ル村田仁右工門下宿ヘ來リ大略申述既ニ陣屋ノ者ドモ伏水ヘ出兵致シタリト申候ナリ翌十一月朔日中川家臣用人熊田用助留守居熊田万八來リ主人篤ト勘考各方被申通納得被致彌右衞門一類赦免申付飛脚相立私共ハ今夕上京仕正親町大納言樣御緣家ノ訳ニ付御詫申上議奏御方ニ御取計御賴申上候如何哉ト申候ニ付御尤ノ御事ト相答候也其後歎願書出御憐宥ヲ以格別ニ不被及御沙汰以來厚ク心懸當時國家安危此時ニ候間精忠盡力可有之候事

（佐佐木高行日記）

用助、上ニ要助トアリ

○文久二年十月廿七日（中川侯一件手島八助書取）

一此節京師ノ邊リ諸浪人躰ノ者往來無之ニ到子細ハ薩州島津三郎君御取鎭以來孰モ帰國致候既ニ中川修理太夫君家來小川彌右衞門等モ同志引纏メ罷帰候由